

# 古事記傳

卅三

太政官文庫			
和	八	五	〇
書	九	〇	〇
門	三	〇	〇
類	一	三	〇
函	四	九	〇
架	冊	架	冊

內閣文庫			
和	八	五	〇
書	九	〇	〇
類	三	〇	〇
函	四	九	〇
架	冊	架	冊

內閣文庫			
番號	和	8500	
冊數	49(38)		
函號	137	2	



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



多如吾部... 命之

古事記傳三十三之卷

明宮中卷

又吉野國主等瞻大雀命之

所佩御刀歌曰本年多能比能

美古意富佐邪岐意富佐邪岐

波加勢流多知母登都流藝須

明治九年購求

本居宣長謹撰

惠布由布由紀能須加良賀志

多紀能佐夜佐夜

又云云。上ノ御哥どもを挙て。又哥を挙むやまれば  
なり。○吉野上ノ出。傳十八の。○國主を白檮原宮段ノ  
を國巢と書て。書紀ノ名。國標と書て。後此書やもりて。  
皆國栖と書て。然依ふ此ノ主字を書依をまらうと。  
異さるなり。抑此を白檮原宮段やも云依如く久受や  
呼後此音便めて。本を久尔須なりまむる。尔須と奴

志と通じて。近々聞ゆ故。如此も書依を依依。主國  
を久尔奴志を其尔奴志のほり切りて。奴と  
ある故。久尔奴志ある其尔志と尔須や近々聞ゆれば  
なり。師を久尔志の意。久尔志を畧き。志を須と轉  
云。官主も奴を畧き。例なり。と云。久尔志の  
意とは此名を國主字此意と心得らま。さるや何れ  
よ。了れ。此主字も。借字ふて。此意の名も。非  
音を取。依も。非。は。國巢此事を。彼。白檮原宮段  
傳十八の。よ云。下や。下。云。修。○瞻大雀命之所  
七十一葉。佩御刀。こ。次。大御酒を醸て。献依と。其同時の  
事。又何時。ふて。何れ。修。○本年多能。此御名多  
と。濁依。品陀。天皇之。○比能美古。日之御子。な  
了。此御称の事。倭建命。段の哥。見え。下。云。傳



由紀の頭を先言出て言を疊み多かるも何れもか九  
上代此哥を詠む物なれ然るまゝのこゝもを  
もく例ゆれなり水垣官段の哥もなまきのこゝもを  
やと云上よ先古波 ○布由紀能須冬木如なり師を  
夜とゆれ類なり ○如なりと云き那須を能須と云例多万葉十四丁十三  
子奈美尔安布能須浪よ遇安幣流伎美可母又十四丁許  
奈良能須麻具波思兒呂波又二十丁多可伎祢尔久毛乃  
都久能須廿九丁ふ白玉乎手尔登理持て見ゆ乃須母  
家を妹を又見てもやなどあなり那須を稲掛  
如く似ゆと云言なれば能須も云を似ゆを能流  
とも活き云言なればあまさる万葉の春の枕詞冬  
木成と云ゆとや処くよゆ此冬木盛を写誤り冬  
との師説可あと動くる然ゆ伝きこと思は

ゆを此正しく布由紀能須とゆ傳彼も疑  
をなれはゆを考ふ傳きことなり  
此冬木如多あ枯と云言れり爾此係ゆ枕詞  
なま加良賀志多紀と云句 ○加良賀志多紀能多枯之  
下樹之なり枯を加良とも云ハ高津宮段み枯野哥よ  
怒とやどあゆが如くさて此枯を上を依御哥此枯  
と同意ふて葉此落亡ゆを云下巻出雲國造神賀詞み  
弥高尔天下乎所知食牟事志太米あこの免下所見  
えゆとゆれ志太と同く下かなど云意ゆ俗  
を云  
語云は葉此落下地と云ゆなり延佳も契冲も上  
此句此頭は属ゆ非をなされバ伊勢神さて此二  
室の須我流横刀を引ゆれも此を叶は矣



河共カ二方ニ小係コ也。且クハ並タ夕タの競キ。又マ三ニ朝獵アサガリ尔鹿ニシ  
 猪イノ踐ミ起テ暮獵ムサガリ尔鷄ニ雉トリ履フ立クテと何ナニ於ニ朝獵アサガリの鹿シ猪イノ暮獵ムサガリ  
 の鷄トリ雉トリと云イハる非ハ以テ朝獵アサガリ暮獵ムサガリの獸モノをシ今イマ起テ此コら  
 を以テ准スるをシ以テ依ル。

又マ於ニ吉野キノ之ノ白シ檮ニ上ニ作シ横ヨ白ク而テ。  
 於ニ其ノ横ヨ白ク釀ス大ニ御酒ミカミテ獻ス其ノ大ニ御ミカミテ。  
 酒サケ之ノ時トキ擊ツ口ノ鼓ヲ爲シ伎ヲ而テ歌フ曰ク加カ。  
タテツルトキニクチツミヲウチワザラナシテウタヒケラクカ。

志シ能ノ布フ邇ニ余ヨ久ク須ス袁ラ都ツ久ク理リ余ヨ。  
 久ク須ス邇ニ迦カ美シ斯シ意オ富ホ美ミ岐キ宇ウ麻マ。  
 良ラ爾ニ岐キ許コ志シ母モ知チ袁ラ勢セ麻マ呂ロ賀ガ。  
 知チ此コ歌ノ者ハ國ク主ズ等ド獻オ大ホ贄ニ之ヘ時タ。  
 時トキ恒ニ至イ于マ今イタル詠マ之デ歌ウ者タ也ナリ。





了。今の大藏明神。今も檉尾村と云あり。國栖と相近。  
此地なり。そもく此地名ありと白檉樹生りしよ  
了。我負りけむ。かて鹿塩と云はる依て思ふ。本  
加志布と云まむを。布と富と。此の哥をれば。調此と  
免ふ之を添て云はる。又そと加志能布ありしむを  
や。後ふ之を省て。加志富とをなむ。古よ之と云  
多云例。其間を今決免か。契冲が上。文よ白檉上と  
記まると聞ゆれば。上を布と通は。云はる。白檉の地  
名の。又白檉の木を敷ふ其上を云ふ。又按よ古事記  
の今。本生字を誤て上よ作す。云はると云ふを。其地  
云はると生を上り誤す。云はると云ふを。其地名を  
了。○余久須衣都久理ハ横白を作らり。許宇を切  
て久と

云はる。○余久須衣と。横白ふなり。○迦美斯意富美岐を。  
釀大御酒なり。書紀り。美斯を綿蘆とあり。迦美斯  
迦米流と云とを。意いさ。の異を。此の何を。て  
も宜まう。迦米流の方。い。の勝なり。九て此言。  
此。二。格。差別。何れ。を。今。人。○宇麻良。美  
の。其。け。ぢ。を。辨。了。一。小。用。事。を。り。  
味と云ふ。同。書紀。顯宗。卷。室壽御詞。新墾之十握  
稻之穗。於淺甕釀酒。美飲喫哉。美飲喫哉。此云于魔羅你  
鳥野羅甫屢柯佞也。を。や。ら。ふ。あ。ゆ。の。い。り。○岐許志  
母知表勢。所聞以食。な。を。以。を。添。多。れ。言。を。契冲が  
と通ひ。知と之。同韻。て。通。了。解。なり。け。て。表須を賣  
須と。同。云。了。所。聞。看。せ。と。云。之。を。又。飲。を。も。表

須と云ふは、己が献酒を、如此申せ給ふ人、此真心  
美稱、人、物、を、贈、は、と、も、身、の、志、を、の、深、き  
其、趣、を、贈、る、も、然、は、後、世、を、反、覆、し、賜、を、の、人、に  
物、を、贈、る、も、饗、は、る、も、た、り、下、る、詞、を、の、人、に  
こ、と、ま、は、は、漢、國、の、俗、に、は、り、は、人、の、得、さ、せ、る、物、を、少、  
く、悪、き、を、も、多、き、は、不、好、き、さ、る、不、謝、詞、し、我、が、人、に  
贈、は、物、の、美、く、大、な、を、も、塵、く、小、き、さ、る、不、云、や、  
同、ト、ほ、と、な、る、云、や、れ、言、は、る、う、り、を、偽、言、な  
依、こ、と、目、に、前、り、は、を、ま、さ、る、世、に、形、を、と、な、る、  
ね、ま、ば、其、を、よ、き、こ、や、思、ふ、免、る、此、國、栖、が、哥、を、と、も、  
後、世、人、を、と、り、か、は、る、く、を、と、り、は、り、や、さ、ば、う、り、  
山、與、形、に、賤、者、の、い、や、も、畏、き、大、御、前、に、献、む、ら、い、か  
ば、加、ら、る、可、ら、る、言、申、さ、る、を、美、味、ら、る、を、思、ふ  
ま、せ、と、も、申、せ、給、古、人、此、心、の、直、う、ま、い、ほ、ど、を、思、ふ

後世人の心此内あり、い、き、物、ぞ、と、思、ふ、漢  
國、意、の、と、偽、を、真、実、な、る、○、麻、呂、賀、知、の、麻、呂、を、我、己、な  
ぬ、事、多、き、を、さ、し、は、は、し、○、麻、呂、賀、知、の、麻、呂、を、我、己、な  
ど、云、の、如、し、此、稱、い、と、古、き、を、奈、良、と、り、何、を、と、り、書、り  
この物、り、の、常、多、く、見、え、と、り、古、く、も、人、名、り、の、多、き、も、  
此、と、り、出、を、引、な、む、契、冲、と、り、繼、躰、紀、に、懿、哉、麻、呂、古、云  
云、と、何、を、引、な、む、吾、子、と、云、意、と、り、何、を、と、り、書、り、  
ま、と、同、卷、に、朕、子、麻、呂、古、と、り、何、れ、バ、此、を、句、大、兄、皇、子  
の、亦、御、名、と、り、聞、え、と、り、此、外、り、を、麻、呂、古、と、云、彼、此、  
見、え、と、り、但、し、其、名、も、今、吾、子、と、云、意、以、て、何、を、と、り、  
り、の、あ、ら、む、あ、さ、り、師、説、し、自、麻、呂、と、稱、ふ、と、り、何、を、と、り、  
と、意、を、う、と、り、と、云、り、對、言、て、か、ど、な、る、と、り、何、を、と、り、  
云、意、ふ、と、り、拙、く、愚、を、由、此、稱、を、り、云、意、と、り、何、を、と、り、  
古、の、物、言、と、り、聞、え、と、り、漢、意、ま、さ、り、と、り、何、を、と、り、  
人、を、尊、み、て、云、稱、ふ、と、り、上、卷、阿、斯、訶、備、比、古、遲、神、の、下、  
云、は、が、如、し、傳、三、の、此、の、吾、君、と、云、意、と、り、何、を、と、り、  
必、し、も、父、と、  
云、意、と、り、申、せ



武天皇行幸吉野時云々。尔時詔賜國栖名。然後孝德天皇御世始賜名人國栖意世古。次号世古二人允恭天皇御世乙未年中七節進御贄仕奉神態至今不絕。此文神德の徳字を誤りてむの允恭天皇とて先り阿比岐を又号世古此号字を乎の誤を依傍し神態とを此口鼓を打伎をを歌ふ云古風形る故も神態とを云依形りさる國栖人の物と見え續紀弘仁内裡卅一正六位上國栖小國授外從五位下式元正儀云々。觴行一周吉野國栖於儀鷺門外奏歌笛。献御贄。若有蕃客不奏他皆放此。爾七日會式。一觴之後吉野國栖献御贄奏歌笛。十六日蹈歌式。十一月新嘗會式。云々。此事見え。貞觀儀式大嘗祭儀。宮内

官人率吉野國栖十二人。檜笛工十二人。並著青摺布衫。入自朝堂院南。左掖門就位。奏古風。其群官初入。隼人發声。立定。乃止。訖。國栖奏古風五成。次云々。同辰日儀。一觴之後吉野國栖於儀鷺門外奏歌笛。并献御贄。新嘗會儀元日儀。同七日儀。同十六日蹈歌儀。云々。右の如く見え。又九月九日儀。一兩觴之後吉野國栖於兼明門外奏風俗。と見ゆ。儀鷺門を豊樂院の正門兼明門を内裡此正門なり。大嘗祭式卯日儀。宮内官人引吉野國栖十二人。檜笛工十二人。並著青摺布衫。入自朝堂院東掖門就位。奏古風。太政官式吉野國栖奏古風とあり。檜笛とをいひな依笛を云ふ。若し檜木葉を卷て笛あり。云々。云々。

む。猶、字、儀式一本、  
榴一本、猶と作す、  
宮内省式、  
九諸節會、  
吉野、  
國栖  
獻、  
御贄、  
奏、  
歌、  
笛、  
每、  
節、  
以、  
十、  
七、  
人、  
為、  
定、  
國栖十二人、  
笛工五人、  
在山  
城、  
國、  
綴、  
其、  
十、  
一、  
月、  
新、  
嘗、  
會、  
各、  
給、  
祿、  
無位、  
庸布二段、  
浦、  
九  
喜、  
郡、  
諸、  
節、  
賜、  
群、  
官、  
饗、  
者、  
正、  
月、  
一、  
日、  
十、  
六、  
日、  
九、  
月、  
九、  
日、  
等、  
三、  
節、  
親、  
王、  
己、  
下、  
云、  
國、  
栖、  
笛、  
工、  
正、  
月、  
七、  
日、  
十、  
七、  
日、  
五、  
月、  
五、  
日、  
七、  
月、  
二、  
十、  
五、  
日、  
十、  
一、  
月、  
新、  
嘗、  
會、  
等、  
五、  
節、  
親、  
王、  
己、  
下、  
云、  
國、  
栖、  
笛、  
工、  
民、  
部、  
省、  
式、  
九、  
吉、  
野、  
國、  
栖、  
永、  
勿、  
課、  
役、  
政、  
事、  
要、  
畧、  
二、  
十、  
七、  
十、  
一、  
月、  
三、  
清、  
涼、  
記、  
中、  
辰、  
日、  
節、  
會、  
事、  
云、  
吉、  
野、  
國、  
栖、  
於、  
兼、  
明、  
門、  
外、  
奏、  
歌、  
笛、  
其、  
詞、  
云、  
賀、  
進、  
御、  
贄、  
を、  
見、  
え、  
此、  
政、  
事、  
要、  
畧、  
其、  
詞、  
云、  
載、  
於、  
此、  
の、  
哥、  
此、  
訛、  
也、  
故、  
多、  
賀、  
芝

乃、  
不、  
尔、  
與、  
古、  
羽、  
須、  
遠、  
惠、  
利、  
天、  
賀、  
女、  
多、  
於、  
保、  
美、  
岐、  
味、  
良、  
居、  
於、  
世、  
古、  
世、  
九、  
賀、  
朕、  
と、  
云、  
國、  
栖、  
の、  
世、  
を、  
歷、  
了、  
傳、  
來、  
て、  
か、  
く、  
中、  
昔、  
る、  
傳、  
歌、  
を、  
傳、  
了、  
絶、  
に、  
仕、  
奉、  
を、  
い、  
と、  
ま、  
を、  
た、  
身、  
を、  
絶、  
ぬ、  
ゆ、  
を、  
い、  
や、  
く、  
と、  
ち、  
を、  
賀、  
女、  
多、  
を、  
醸、  
あ、  
れ、  
と、  
云、  
こ、  
と、  
を、  
傳、  
居、  
字、  
を、  
写、  
誤、  
を、  
傳、  
了、  
古、  
世、  
を、  
萬、  
葉、  
に、  
多、  
き、  
許、  
傳、  
了、  
か、  
於、  
世、  
を、  
假、  
字、  
乱、  
れ、  
古、  
世、  
を、  
萬、  
葉、  
に、  
多、  
き、  
許、  
傳、  
了、  
曾、  
の、  
世、  
を、  
今、  
京、  
に、  
な、  
り、  
て、  
孔、  
哥、  
を、  
許、  
世、  
と、  
い、  
え、  
傳、  
例、  
此、  
字、  
を、  
書、  
ゆ、  
ふ、  
也、  
然、  
ら、  
ぬ、  
と、  
云、  
此、  
字、  
を、  
書、  
る、  
と、  
云、  
右、  
の、  
書、  
と、  
も、  
奏、  
歌、  
笛、  
と、  
云、  
て、  
笛、  
の、  
事、  
も、  
見、  
え、  
傳、  
了、  
此、  
記、  
も、  
書、  
紀、  
も、  
笛、  
を、  
吹、  
ぬ、  
事、  
も、  
見、  
え、  
傳、  
了、  
為、  
伎、  
と、  
云、  
よ、  
こ、  
を、  
傳、  
了、  
後、  
に、  
添、  
ぬ、  
事、  
の、  
元、  
來、  
の、  
事、  
な、  
れ、  
傳、  
了、  
其、  
笛、  
を、  
猶、  
笛、  
工、  
を、  
見、  
え、  
上、  
に、  
云、  
傳、  
了、  
如、  
く、  
あ、  
ら、  
む、  
う、  
と、  
思、  
は、  
れ、  
北、  
山、  
抄、  
大、  
嘗、  
會、  
條、  
に、



率人將地

とよむと和名抄尾張紀伊など此郡名の海部も阿  
非なり末と河星さして海部多下卷甕栗宮段御哥よ斯毘都久  
阿麻など河星上卷又此下又書紀万葉など海人  
書又書紀万葉よ白水即万葉よを泉即磯人海夫海  
子など書里和名抄辨色立成云白水即今按日本  
紀云用漁人二字一云用海人二字和名阿萬と河星白  
とを泉字を分て云を海了漁子和名伊乎止利漁父無良潜  
女岐加米豆など河星も皆海部の属なり○山部書紀顯宗  
卷よ云く讀讓於上道臣等而奪其所領山部と見え安  
卷よ筑紫国膽狭山部と河星を豊前国諫山郷山部  
河星其処の部りて膽狭の山部りて河星

連と云姓も河星を原次り云○山守部山を守係を  
職と其係一種此部此民なり大山守命此部を督  
あまし是なり後の山部連と書紀五年秋八月令諸  
云姓も此部を掌事係由なり  
國定海人及山守部と河星顯宗卷よ云く小楯謝曰山  
官宿所願乃拜山官改賜姓山部連氏以吉備臣為副以  
山守部為民以山守部為民を小楯と吉了狭之城山  
君韓侖宿祢云く充陵戸兼守山削除籍帳隸山部連を  
ど見ゆこきり此趣を思ふ山部と山守部と二つ河  
らる同物と聞ゆ河星此ふ別り奉る河星いかふ河星  
書紀よ山部を無きぞ正しかれ修養万葉二よ神樂浪

乃大山守者為誰可山尔標結君毛不有國三四十丁山  
守之有家苗不知尔其山尔標結立而又山主者蓋雖有  
六北丁大王之界賜跡山守居守云山尔七二十丁山守  
之里边通山道曾二卷大山守とよ免於大をさるるを  
を依由を以て此山守を称て云續紀五丁初充守山戸  
形り大御巫などの大れ如し續紀五丁初充守山戸  
令禁伐諸山木初を又更ふ初て怒らさるるや○伊  
勢部々玉垣官段ふ定河上部傳北四の下卷高津官段  
ふ定葛城部若櫻官段ふ定伊波礼部など其地の部と  
名を負せし其地ト置依者多き其々皆其由縁河  
里なる依は此伊勢部々何れ故ふ定るるさるるの知

か書紀多事見え交他書りも伊勢部と云物  
實録十四ふ大和国馬立伊勢部甲中見えと依ると形り三代  
神と云見此多三社の名多依修り○劔池多既ふ上  
ふ出あり傳北二の然多舊よる有しが類は多  
あれ余修理を直され多依を作とを云なむ然依例  
見書紀りも十一年冬十月作劔池輕池鹿垣池厩坂池  
と何里○堤池多堤と池やなり堤多川及池をどの堤  
を築事池多池と掘事を多さる都々美多水を包み  
外有漏り溢らさぬ由れ名なり万葉三二十丁彼山之  
堤有海曾なと何里和名抄ふ堤又作堤和名豆々美○  
為役之役字諸本並渡と作依多誤多依修り今多延佳

本より従子皇高津官殿より。役素人作茨田堤及茨田三  
宅と河邊築なり。此、為役三字を延陀多世と訓  
為字多陀多世の世に於て。書源あり。記中此例  
多し之字を新羅人を指しおる。許礼表と云意は  
て書源あり。延陀知を役立を皇と延陀役字に音  
を讀む。水垣官段役病れ延陀充の約り。此言の  
傳北三北北二葉考合を。延陀知を民の其事に發趣くを云。万葉十四  
詳なり。延陀知を民の其事に發趣くを云。万葉十四  
於保伎美乃美己等可思古美可奈之伊毛我多麻久良  
波奈礼欲太知伎努可母々々延陀知を東言ふ。欲太知  
と云。十六二十。課役徵者。今本よエダスと訓  
此建内宿祢の新羅人の参来。延陀知を引率て役使て

處に堤を築き池と掘らせを。此、百  
濟池也。此外古書に見え。此、百濟也。  
池の名か。此、事下。又其地名。百濟。和  
名抄。攝津國百濟。久太郡。河内國錦部郡百濟  
郷。河内書紀敏達卷。宮于百濟大井皇極卷。百濟大  
井家。河内書紀。此、同卷。石川百濟村と河内書  
郡。又舒明卷。百濟川側為宮處。徙於百濟宮  
と河内書。三代實錄。八。大和國十市郡百濟川云。  
中。河内書。河内書。廣瀨郡。今、廣瀨郡  
百濟村。河  
明紀。三代實錄。考合。河内書。天武紀。繕兵於百濟家。



紀とを。もとより傳異ありて。池も別を傳う。大和志より。韓人、池をば。城下、郡唐古村に在て。今ハ柳田池と云よ。一記し。よれど。唐古て。村名より。かきての。れ。例のおぼ。かか。

亦百濟國主照古王。以牡馬壹

足牝馬壹足。付阿知吉師。以貢

上。此阿知吉師者。亦貢上横刀

及大鏡。又科賜百濟國。若有賢

人者。貢上。故受命。以貢上人名

和邇吉師。即論語十卷。千字文

一卷。并十一卷。付是人。即貢進

此和爾吉師。又貢上手人。韓鍛

名卓素。亦吳服西素二人也。

百濟國主國主を許尔伎志とも許伎志とも訓傳き由

神功皇后段傳世の六十葉の云ふ如し百濟國も彼処より出

る傳同卷の六十五葉此國王此先祖を續紀四十より百濟遠祖

都慕王者河伯之女感日精而所生了夫百濟太祖都

慕大王者日神降靈奄扶餘而開國を以て都慕王者

姓氏録にも知く小見えあり濟公を以て條り印本小

孝慕王と云ふ也古本より都慕王なりかゝる後漢

書小夫餘國云初北夷索離國王出行其侍兒於後倭

身王還欲殺之侍兒曰前見天上有氣大如雞子來降我

因以有身王囚之後遂生男王令置於豕牢豕以口氣虛

之不死復徙於馬欄馬亦如之王以為神乃聽母收養名

曰東明東明長而善射王忌其猛復欲殺之東明奔走南

至掩滯水以弓擊水魚鼈皆聚浮水上東明乘之得渡因

至夫餘而王之焉と云ふさて北史百濟傳より右の後漢

書に載多し此事を記して云く東明之後有仇台篤於行

信始立國於帶方故地漢遼東太守公孫度以女妻之遂

為東夷強國初以百家濟因号百濟と云又後漢書に

高句麗を以て夫餘別種と云又魏書に高句麗者出

於夫餘自言先祖朱蒙母河伯女為夫餘王開於室

中為日所照引身避之日影又逐既而有孕生一卵大如

五升夫餘王棄之與犬犬不食棄之與豕豕又不食云

遂還其母其母以物裹之置於暖處有一男破殼而出及

其長也字之曰朱蒙其俗言朱蒙者善射也云又夫餘之

臣又謀殺之朱蒙母陰告知朱蒙曰云朱蒙乃與烏引

東明が事を記して高句麗の祖とせられ朱蒙を混ら  
かゝる所又朱蒙即東明と心得て記す所の何れ  
也當きれとされ修して朝鮮の東國通鑑に百  
濟始祖高温祚王と云其より世を記し以扶餘為氏  
といむ始祖元年と漢成帝の鴻嘉三年はかゝて息長  
當りりとせり垂仁天皇の十二年なり  
帶比賣大后比御時より皇朝を歸服して世に殊に親  
と忠に奉仕来り居す故其國人の参来て皇國に留ま  
りて姓氏録諸蕃齊明天皇御世六年に新羅と唐と  
其氏に多し王國を滅さしめて義慈王と云う世なり  
璋と禪廣と二人皇國に参入り居ありしを豐璋を感國  
に還されて云にせし禪廣を皇國に留まりて其子孫  
天皇御世に百濟王と云号と賜はてり其子孫を  
を相繼て姓にたりて百濟を姓して王を非なり許  
尔伎志と訓は意富伎美と訓をいふ非なり許  
て右の二人と書紀に余豐璋余禪廣もあはれ余を彼

國王の姓なり又善光と云は禪廣と同じの別を  
か詳々を禪廣の子昌成其子良虞南典良虞の  
子敬福此外も百濟王某と云は人世に此史に多く出  
るは皆此氏人なり何れも官位を賜はりて全の皇  
朝諸臣の列をりき此氏今京に至るも居て姓氏録  
右京諸蕃に載り河内国交野郡に此氏の居趾とて  
今も有りとぞ其処に百濟寺と云はる西宮記に百  
濟王と交野檢校と云はるをさしこ見えと里  
○照古王也師を芭蕉などの例にせむと訓多し  
と出たは韓人の名ども凡て皆其ありあり讀が  
し後今々々々字音の如く音便にせむと訓多し  
り交假字れり如く音便にせむと訓多し  
り又照字れ假字を書紀神功卷四十六年の処に百  
濟背古王と見え四十九年の処に其王背古と見え五  
十五年は百濟背古王薨と見えは背字を皆肖を写

誤ミ也ト。依レ北ハ百濟第六世の王ヲ。其元年ニ後漢桓  
帝永康元年ニ成務天皇ニ世七年ニ也。神功皇  
后ノ新羅ヲ征賜シ年ニ。又欽明卷ノ百濟聖明王曰。昔  
我先祖速古王貴首王ノ世安羅加羅卓淳旱岐等云々。  
と云ハ。彼大后ハ御世ノ事ヲ。速古王即シ肖古王  
なり。此ハ肖ト速ト彼國音相通ス。書ヲ見ル。又速  
道ノ誤リ也。然レ非シ。姓氏錄百濟ハ氏ト  
の中ニ速古王ノ後也。と云ハ多ク其ヲ一本ト也。  
を肖古王ト也。速古王ノ中ニ後ニ人レさカらズ  
改メ速ト元ト速古王ト又連古王ト也。  
協シ其ノ誤リ也。又近速王ト云ハ速古王ト也。  
古ノ字ハ脱ス也。近肖古王ト同人ト也。近肖古  
王ノ事ヲ。次ニ云ハ。津連真道等上表言真道等

本系出リ自リ百濟國貴須王。貴須王者百濟始興第十六世  
王也。夫百濟太祖都慕大王者。降リ及リ近肖古王。遥慕聖  
化始聘貴國。是則神功皇后攝政之年也。其後輕嶋豐明  
朝御宇應神天皇ニ國主貴須王云々ト見ル也。字ヲ背ル肖  
誤リ也。此ハ肖古王ト也。近肖古王ト也。別ニ其元  
年ニ東國通鑑ニ也。依リ仁徳天皇ハ三十四年ニ當  
り。遥シ後ニ形ト也。貴須王ト書紀ニ肖古王ト也。子ト  
して大后ハの六十四年ニ也。貴須王ト見ル也。貴首ト也。東國  
通鑑ニ也。仇首王ト也。又姓氏錄ニ近貴首王ト云々  
見ル也。依リ此ハ王ト大后攝政ノ御世ト也。此  
御世ハ應神ト也。及リ後ニ也。如ク也。大后ハ御世  
と云ハ協ス也。此ハ記ス也。即シ此ハ天皇ト應神トの御世ト也。

違ふに於て、されば馬を貢<sup>コト</sup>ふ。阿知吉師を貢<sup>コト</sup>ふ。五年、肖古王薨<sup>シ</sup>と云<sup>レ</sup>。然<sup>レ</sup>、協<sup>レ</sup>、書紀<sup>ノ</sup>、十五年、神<sup>ノ</sup>、  
知<sup>ル</sup>、百濟王遣<sup>テ</sup>、阿直岐貢<sup>ル</sup>、良馬六匹、云<sup>フ</sup>、と云<sup>レ</sup>。此<sup>ノ</sup>、時<sup>ニ</sup>、  
彼國阿花王と云<sup>フ</sup>、世<sup>ニ</sup>、傳<sup>ル</sup>、異<sup>ナ</sup>、る。書紀<sup>ニ</sup>、云<sup>フ</sup>、  
濟國殺<sup>シ</sup>、辰<sup>ノ</sup>、斯<sup>ノ</sup>、王<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>、謝<sup>ス</sup>、之<sup>ヲ</sup>、紀<sup>ス</sup>、角<sup>ノ</sup>、宿<sup>ノ</sup>、祢<sup>ノ</sup>、等<sup>ヲ</sup>、便<sup>ニ</sup>、立<sup>テ</sup>、阿花<sup>ヲ</sup>、為<sup>シ</sup>、王<sup>ト</sup>、而<sup>シ</sup>、歸<sup>ル</sup>、  
十六年、百濟阿花王薨<sup>シ</sup>、と云<sup>フ</sup>、合<sup>シ</sup>、以<sup>テ</sup>、阿花<sup>ヲ</sup>、王<sup>ト</sup>、肖古<sup>ノ</sup>、王<sup>ノ</sup>、  
曾孫<sup>ト</sup>、なり、さて、東國通鑑<sup>ニ</sup>、多<sup>ク</sup>、合<sup>シ</sup>、以<sup>テ</sup>、阿花<sup>ヲ</sup>、王<sup>ト</sup>、肖古<sup>ノ</sup>、王<sup>ノ</sup>、  
其<sup>ノ</sup>、元<sup>ノ</sup>、年<sup>々</sup>、晋<sup>ノ</sup>、大元<sup>ノ</sup>、十七<sup>ノ</sup>、年<sup>ト</sup>、云<sup>フ</sup>、仁<sup>ノ</sup>、德<sup>ノ</sup>、天<sup>ノ</sup>、皇<sup>ノ</sup>、八<sup>ノ</sup>、十<sup>ノ</sup>、年<sup>ト</sup>、  
云<sup>フ</sup>、其<sup>ノ</sup>、薨<sup>シ</sup>、と云<sup>フ</sup>、其<sup>ノ</sup>、十<sup>ノ</sup>、四<sup>ノ</sup>、年<sup>ト</sup>、云<sup>フ</sup>、あ<sup>リ</sup>、仁<sup>ノ</sup>、德<sup>ノ</sup>、天<sup>ノ</sup>、皇<sup>ノ</sup>、履<sup>ニ</sup>、中<sup>ノ</sup>、天<sup>ノ</sup>、皇<sup>ノ</sup>、六<sup>ノ</sup>、年<sup>ト</sup>、  
云<sup>フ</sup>、あ<sup>リ</sup>、れ、は、書紀<sup>ニ</sup>、と百<sup>ノ</sup>、北<sup>ノ</sup>、年<sup>ト</sup>、云<sup>フ</sup>、違<sup>フ</sup>、り、也<sup>ナ</sup>、く、東<sup>ノ</sup>、國<sup>ノ</sup>、  
通鑑<sup>ニ</sup>、を、信<sup>ス</sup>、が、さ<sup>キ</sup>、と多<sup>ク</sup>、い<sup>フ</sup>、不<sup>レ</sup>、可<sup>ク</sup>、也<sup>ナ</sup>、此<sup>ノ</sup>、年<sup>代</sup>、  
彼<sup>ノ</sup>、書<sup>ニ</sup>、此<sup>ノ</sup>、方<sup>ニ</sup>、と云<sup>フ</sup>、か<sup>レ</sup>、依<sup>テ</sup>、書紀<sup>ノ</sup>、傳<sup>ル</sup>、此<sup>ノ</sup>、乱<sup>レ</sup>、よ<sup>リ</sup>、年<sup>代</sup>、違<sup>フ</sup>、  
不<sup>レ</sup>、可<sup>ク</sup>、也<sup>ナ</sup>、見<sup>ル</sup>、此<sup>ノ</sup>、天<sup>ノ</sup>、皇<sup>ノ</sup>、代<sup>ニ</sup>、御<sup>ノ</sup>、代<sup>ニ</sup>、彼<sup>ノ</sup>、國<sup>ノ</sup>、を、肖古<sup>ノ</sup>、王<sup>ノ</sup>、貴<sup>ノ</sup>、須<sup>ノ</sup>、王<sup>ノ</sup>、  
時<sup>ニ</sup>、云<sup>フ</sup>、華<sup>ノ</sup>、を、誤<sup>ル</sup>、と云<sup>フ</sup>、阿<sup>ノ</sup>、花<sup>ノ</sup>、の、花<sup>ノ</sup>、字<sup>ヲ</sup>、を、華<sup>ノ</sup>、を、依<sup>テ</sup>、  
依<sup>テ</sup>、華<sup>ノ</sup>、を、華<sup>ノ</sup>、を、誤<sup>ル</sup>、と云<sup>フ</sup>、阿<sup>ノ</sup>、花<sup>ノ</sup>、の、花<sup>ノ</sup>、字<sup>ヲ</sup>、を、華<sup>ノ</sup>、を、依<sup>テ</sup>、  
○牡馬<sup>ノ</sup>、賣<sup>ル</sup>、麻<sup>ノ</sup>、

牝馬<sup>ノ</sup>、賣<sup>ル</sup>、麻<sup>ノ</sup>、と訓<sup>ス</sup>、一<sup>ノ</sup>、万<sup>ノ</sup>、葉<sup>ノ</sup>、五<sup>ノ</sup>、美<sup>ノ</sup>、麻<sup>ノ</sup>、御<sup>ノ</sup>、馬<sup>ノ</sup>、書紀<sup>ニ</sup>、土<sup>ノ</sup>、馬<sup>ノ</sup>、  
驢<sup>ノ</sup>、を、と云<sup>フ</sup>、上<sup>ニ</sup>、小<sup>ノ</sup>、連<sup>テ</sup>、云<sup>フ</sup>、言<sup>フ</sup>、阿<sup>ノ</sup>、は、多<sup>ク</sup>、宇<sup>ノ</sup>、○壹<sup>ノ</sup>、足<sup>ノ</sup>、比<sup>ノ</sup>、登<sup>ノ</sup>、  
都<sup>ノ</sup>、と訓<sup>ス</sup>、書紀<sup>ニ</sup>、馬<sup>ノ</sup>、幾<sup>ノ</sup>、匹<sup>ト</sup>、と云<sup>フ</sup>、皆<sup>レ</sup>、此<sup>ノ</sup>、例<sup>ニ</sup>、訓<sup>ス</sup>、雄<sup>ノ</sup>、畧<sup>ノ</sup>、  
卷<sup>ノ</sup>、馬<sup>ノ</sup>、八<sup>ノ</sup>、足<sup>ト</sup>、と云<sup>フ</sup>、其<sup>ノ</sup>、哥<sup>ノ</sup>、子<sup>ノ</sup>、宇<sup>ノ</sup>、麼<sup>ノ</sup>、能<sup>ノ</sup>、耶<sup>ノ</sup>、都<sup>ノ</sup>、擬<sup>ト</sup>、と云<sup>フ</sup>、  
即<sup>チ</sup>、八<sup>ノ</sup>、足<sup>ト</sup>、と云<sup>フ</sup>、と云<sup>フ</sup>、あ<sup>リ</sup>、む、詳<sup>カ</sup>、今<sup>ノ</sup>、世<sup>ニ</sup>、布<sup>ノ</sup>、帛<sup>ノ</sup>、の、  
數<sup>レ</sup>、れ、足<sup>ヲ</sup>、を、比<sup>シ</sup>、伎<sup>ト</sup>、と云<sup>フ</sup>、馬<sup>ノ</sup>、を、出<sup>シ</sup>、れ、と云<sup>フ</sup>、一<sup>ノ</sup>、牽<sup>ノ</sup>、二<sup>ノ</sup>、  
牽<sup>ノ</sup>、と云<sup>フ</sup>、と云<sup>フ</sup>、又<sup>チ</sup>、足<sup>ノ</sup>、字<sup>ヲ</sup>、此<sup>ノ</sup>、音<sup>ノ</sup>、の、訛<sup>リ</sup>、と云<sup>フ</sup>、  
らむ、以<sup>テ</sup>、馬<sup>ノ</sup>、を、御<sup>ノ</sup>、國<sup>ノ</sup>、に、神<sup>ノ</sup>、代<sup>ニ</sup>、と云<sup>フ</sup>、あ<sup>リ</sup>、依<sup>テ</sup>、物<sup>ヲ</sup>、を、書紀<sup>ニ</sup>、欽<sup>ニ</sup>、明<sup>ニ</sup>、  
卷<sup>ノ</sup>、百<sup>ノ</sup>、濟<sup>ノ</sup>、に、使<sup>テ</sup>、人<sup>ノ</sup>、の、國<sup>ノ</sup>、に、還<sup>ル</sup>、時<sup>ニ</sup>、良<sup>ノ</sup>、馬<sup>ノ</sup>、七<sup>ノ</sup>、十<sup>ノ</sup>、足<sup>ヲ</sup>、を、彼<sup>ノ</sup>、國<sup>ノ</sup>、に、  
賜<sup>フ</sup>、事<sup>ヲ</sup>、見<sup>ル</sup>、え、あ<sup>リ</sup>、依<sup>テ</sup>、今<sup>ノ</sup>、返<sup>リ</sup>、て、彼<sup>ノ</sup>、を、貢<sup>ス</sup>、了<sup>ル</sup>、殊<sup>ノ</sup>、  
依<sup>テ</sup>、良<sup>ノ</sup>、馬<sup>ノ</sup>、を、貢<sup>ス</sup>、了<sup>ル</sup>、○阿<sup>ノ</sup>、知<sup>ノ</sup>、吉<sup>ノ</sup>、師<sup>ノ</sup>、此<sup>ノ</sup>、名<sup>ヲ</sup>、書紀<sup>ニ</sup>、阿<sup>ノ</sup>、直<sup>ノ</sup>、





元天武卷下十二年冬十月阿直史賜姓曰連姓氏録  
安勅連百濟國魯王之後也續後紀三下阿直史福吉同  
姓核公等三人賜姓清根宿祢核公之先百濟國人也○  
亦貢上横刀及大鏡クハナノミタ之何知吉師ツツ附ツクて了非コト以異  
時此事トキなり亦モトと云イハ其意コトなりさて横刀も鏡も皇國  
有物アを依ヨふ貢物コト必尋常コトなりト交免コトはコト一トあり  
了コトた依物コトなりト鏡ミタ大と何コトも紫珠ムラサキも大コトは  
書紀コト了コト神功コト卷下五十二年秋九月久底等コト從千熊長  
彦詣コト之則獻コト七枝刀一口七子鏡一面及種コト々重宝コト云々  
とありコト七子鏡コト漢籍コトも見えコトるコト周コトは七コト子コト以  
て俗コトに九曜コト紋コトと云物コトの如コトき狀コト一コトありコト鏡コト

や何かの太后攝政の御世と云即此天皇此御世を  
書紀此に記せられた御代違ふ依は非コト以コト○百濟國コトを科コト  
賜コト了係コトなり若コト有賢人者コト了係コト科コトを仰コトなり○賢人コトを佐コト  
加志毘登と訓傳し書紀に賢賢人賢哲賢良明哲君子  
をど然訓に上卷八千矛神御哥り佐加志賣書紀仁徳  
卷に賢遺此云左河之能菩里コトなり見コトゆ又コトさかコトしコトきコト  
も訓傳し万葉三よ古之七賢人等毛○和迹吉師等真  
寺本延佳本コトを吉字無コト但コト真福寺本コトを次コトな依  
細書コトの処コトに此字コト以コト了係コト此コト知コトりコト多コトきを誤コトて脱コトせられた  
そのなを然依を延佳本コトの上コトの何知吉師コトを書紀コトに何  
直岐と何依を依て吉を了係コト上コトに屬コトて師コトを一字離コトして  
かふみと何と訓傳し了係コトを了係コトて此コトをコト同コトく然訓コトにコト多コトく  
りさるコトらよ吉字コトを了係コト能コト多コト依コトを了係コトし今コトを多コトく

の本及書紀釋引依り書紀の十五年云於是天皇  
皆吉師と所り依り書紀の十五年云於是天皇  
問河直岐曰如勝汝博士亦有耶對曰有王仁者是秀也  
時遣上毛野君祖荒田別巫別於百濟仍徵王仁也十六  
年春二月王仁來之則太子菟道稚郎子師之習諸典籍  
於王仁莫不通達王仁は姓を依り然り此記  
和迹と所り照してわにと此を讀み修むれ字音續紀  
の可しく所り知るふと讀み修むれ字音續紀  
四十一文忌寸最弟武生連真象等言云有勅責其本系  
最弟等言漢高帝之後曰鸞鸞之後王狗轉至百濟久素  
王時聖朝遣使徵召文人久素王即以狗孫王仁貢焉云  
云久素王即貴古語拾遺云至於輕嶋豐明朝百濟王

貢博士王仁云至於後磐余稚櫻朝三韓貢獻奕世無絕  
齋藏之傍更建內藏分收官物仍令阿知使主與百濟博  
士王仁記其出納始更定藏部櫻朝元年百十餘  
年を經たり疑はし王仁其御世を存じたりむむ甚く長壽  
く也所り疑はし王仁が子孫と云を傳へり  
誤りれり也さる河内志り王仁墓在河内國交  
野郡藤坂村東北御墓谷今稱於亦墓と云り○論語  
千字文論語をさらぬとなりれども○千字文と此時に貢  
りと云ことを心得じ此御代にころ未だ此書世間に

傳はれ修き由るを修めり其故を集註千字文序云  
州城大夫鍾繇造得此文上天子帝愛不離其手晉被宋  
文帝遂移向丹陽避難其千字文在車中路逢雨車漏濕  
千字文行至丹陽藏書篋中晉治天下得十五帝共一百  
五十年宋文皇帝劉裕兼位治天下因晉帝書庫中見此





是書紀雄畧卷一河内國古市郡人書首加龍齊明卷一

河内書首名天武卷二書首根麻呂名也見え同卷十二

年九月文首賜姓曰連十四年六月書連賜姓曰忌寸續

紀四十文忌寸最弟等上表云文忌寸等元有二家東文

稱直西文号首相比行事其來遠焉今東文奉家既登宿

祢西文漏恩猶沉忌寸於是其弟及真象等八人賜姓

宿祢姓氏錄左京諸蕃漢文宿祢出漢高皇帝之後鸞王也

由文忌寸文宿祢同祖宇尔古首之後也さて此氏は

其多一其を了此氏の外は別り文直と云氏河

尸を直して姓氏錄云文忌寸坂上大宿祢同祖都賀直

之後也と河内書紀云其氏人もこれう見えあり首

と顯との尸を以て辨ふはさて其氏人も世々倭國

文首と云見右引海續紀云河内文首ふ了東西を即や

居在皇城左右故曰東西也と河内但此注を了義解

を東西と云ゆたりた皇城の在り居るも倭國あり故

を文直も共了連ふあり又忌寸をなれはよ了兩氏い

紀三左京人文忌寸繼立改忌寸賜宿祢焉歲主三雄繼立

河内國先並百濟國人也と河内繼立是河内人と河内

西文を依修く歲主等もつは多れは西文形依修く其

國人と云依神祇令よ六月十二月晦日大被東西文部

上被刀讀被詞義解小東漢文直西漢文首祝詞式大被

詞終ふ東文忌寸部献横刀時咒西文部准之此文部の  
後詞を讀儀を四時祭式に見えり其の被詞と云を  
式の大被詞れ未載ある謹請皇天云々此の如く此  
解を謂文部漢音可讀者といひさて此の如く此  
を献す詞を讀こ中其の本國の傳事を修きを何  
此御代より雜用始賜むむさて此文部とあ  
部をフヒトベと訓を非なりフヒトベと訓修きを史  
前代以来奕世継業或為史官或為博士因以賜姓總謂  
之史也とありて此其史と云尸れ氏に倭河内  
居者と云文首直れ事非思混ふ修り文  
さ又右の神祇令の義解東漢文直西漢文首と  
海漢を共り漢國人れ末の氏を修故り云云九て漢國  
と云來あり混ふやま心得お修り但皇極紀に倭漢  
書直縣孝徳紀に倭漢書直麻呂を云人見えぬ  
と云修を義解云修意と異なりは又文字阿夜漢  
と云訓故りの漢直と紛むて文首直の起をアヤ

と訓修り種々混れ非なり九て此文首氏のくと是右  
此如く種々混れやまきくも多しとくせざる誤  
修り了和迹吉師の後を姓氏録り文宿祢をどの外  
中武生宿祢櫻野首栗栖首古志連をどの何里皆文首  
より也別修りむ○手人等諸本並人手と作ども  
其を下上よ写誤修りくと決修り今改免修り師人  
修りよて豆毘登と訓修りかどて修りを人手を書  
書修り由もなく又修り書さるる此記の例り非修り書  
紀雄畧卷よ吉備臣弟君還自百濟献漢手人部衣縫部  
突人部了百濟所献手末才伎了西漢才伎了百  
濟所献今來才伎仁賢卷遣日鷹吉士使高麗召巧手  
者了日鷹吉士還自高麗献工匠須流枳奴流枳等今

倭國山邊郡額田村熟皮高麗是其後也。なご見ゆ。職負  
令内藏寮下。典履二人。掌縫作靴履鞍具。乃檢校百濟  
手部百濟手部十人。掌雜縫作事。大藏省下。りもか。く見  
えぬ。共事字。革字。睨。誤。又。手部も。互毘登。や訓。修  
し。手人。各。諸の物。作。造。工。と云。稱。を。今俗。り。職人。内藏  
寮。式。雜。作。手。造。御。櫛。手。二人。夾。纈。手。二人。臈。纈。手。二人。  
暈。綱。手。二人。造。油。純。手。二人。織。席。手。一人。了。こ。染。手。五人。  
なご。ゆ。れ。手。も。な。手。人。れ。意。を。り。さ。此。韓。鍛。冶。と  
吳。服。と。を。指。て。い。り。○。韓。鍛。鍛。加。奴。知。と。訓。修。上  
卷。傳。八。の。見。ゆ。今。加。遲。と。云。加。奴。知。を。記。せ。る。り。

さて韓國に鍛冶の渡。參。來。て。よ。皇國。り。元。り。ゆ。れ  
を。倭。鍛。と。云。て。分。て。る。倭。鍛。部。書。紀。綏。靖。卷。り。見。え。こ  
皇國の。と。韓國。れ。と。を。鍛。の。法。異。を。ゆ。と。あ。ゆ。も。や。又  
彼國。も。を。諸。器。物。を。と。殊。り。巧。み。造。せ。れ。を。以。て。召。ぬ。れ  
り。ゆ。い。り。り。も。後。了。倭。韓。と。分。せ。り。ゆ。を。異。を。ゆ。事。ゆ  
了。を。ゆ。れ。法。を。今。世。の。鍛。冶。を。何。れ。の。流。あ。の。あ。り。む。刀  
鍛。を。ゆ。れ。法。を。今。世。の。鍛。冶。を。何。れ。の。流。あ。の。あ。り。む。刀  
倭。鍛。の。流。り。ぞ。ゆ。れ。流。を。續。紀。九。よ。云。く。近。江。國。韓。鍛。冶  
百。嶋。云。丹。波。國。韓。鍛。冶。首。法。麻。呂。云。播。磨。國。韓。鍛。冶。百。依  
紀。伊。國。韓。鍛。冶。杭。田。云。等。合。七。十。一。戸。雖。姓。涉。雜。工。而。尋  
要。本。源。元。來。不。預。雜。戸。之。色。因。除。其。号。並。從。公。戸。廿。九。り。  
讚。岐。國。寒。川。郡。人。韓。鐵。師。毘。登。毛。人。韓。鐵。師。部。牛。養。等。一  
百。廿。七。人。賜。姓。坂。本。臣。四。十。一。播。磨。國。美。囊。郡。大。領。韓。鍛。

首廣富云々。○吳服を久礼波登理と訓波登理を機織なり。登を濁。吳國に服織人なり。乃書波登理を服部の部字を畧け。して此事書紀より三十七年春二月遣阿知使主都加使主於吳令求縫工女爰阿知使主等渡高麗國欲達于吳則至高麗更不知道者於高麗高麗王乃副久礼波久礼志二人為導者由是得通吳吳王於是與工女兄媛弟媛吳織穴織四婦女四十一年春二月阿知使主等自吳至筑紫時胸形大神乞工女等故以兄媛奉於胸形大神是則今在筑紫國御使君之祖也既而率三婦女以至津國及于武庫而天皇崩之不及即獻

于天鷲鵲尊是女人等之後今吳衣縫蚊屋衣縫是也と

つれども此を雄畧天皇の御世の事を依ぐ混ぶる所のふて。同雄畧卷よ十二年夏四月身狹村主青與檜主青等共吳國使將吳所獻手末才伎漢織吳織及衣縫凡媛弟媛等海於住吉津云々以衣縫衣縫是飛鳥衣縫部伊勢衣縫之先也と云はれと事此痛く似あはれを思ふ依事も同き乎やされ吳國を行て此手入等を將承於於右の雄畧天皇の御世の事なりを此應神天皇の御世の百濟より貢了服部の事なり傳誤る多しをり。さきかたの久礼波久礼志の導せりと云ふは雄畧の御世の時れこにあれ修九て吳國と通ふ初は國朝貢と云はれおはる仁徳天皇の五十八年吳の朝貢を既子滅ぶるは其地を爲吳と云ふなりさて



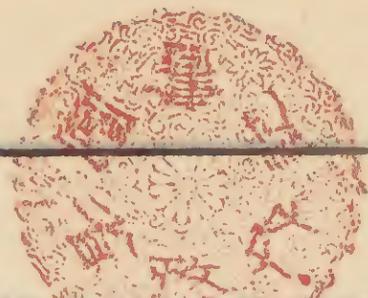
又秦造之祖漢直之祖及知釀

酒人名仁番亦名須須許理等

參渡來也

秦造之祖秦は波陀と訓此祖を弓月君をり書紀より十  
四年是歳弓月君自百濟來歸因以奏之曰臣領己國之  
人夫百二十縣而歸化然因新羅人之拒皆留加羅國爰  
遣葛城襲津彦而召弓月君之人夫於加羅然經三年而

襲津彦不來焉十六年八月遣平群木菟宿祢的戶田宿  
祢於加羅仍授精兵詔之曰襲津彦久之不還必由新羅  
人拒而滯之汝等急往之擊新羅披其道路於是木菟宿  
祢等進精兵蒞于新羅之境新羅王愕之服其罪乃率弓  
月君之人夫與襲津彦共來焉始祖也と云々此御世段よ秦公祖弓月率百  
六縣民而歸化矣姓氏錄左京諸よ太秦公宿祢秦始皇  
帝三世孫孝武王之後也男功滿王仲哀八年來朝男融  
通王一月王應神天皇十四年來朝率二十七縣百姓歸  
化獻金銀玉帛等物仁德天皇御世云々此此文下此



秦始皇三世孫孝武王と云て弓月を其孫と云然  
 五世孫と云ゆあり然ゆふ秦始皇の終れ年を孝元天  
 皇五年と云ゆあり應神天皇元年百四十一年な  
 皇は時代合ひ若き孝武王を十三世孫を十字に  
 脱ゆは時代合ひ若き孝武王を十三世孫を十字に  
 帝十四世孫尊義王之後也と云れ尊義王功滿王が  
 兄弟の此世数ぞ年数不叶されさて又功滿王仲哀天  
 皇御世來朝と云ゆを傳の誤を修してさて弓月王と  
 を非ゆは秦忌寸條も王と云り凡て漢韓人を其王と  
 上弓月と融通と云言れ轉せたり二十七日縣を二  
 こ新井氏云三韓の中辰韓を弓月君歸化縣を二  
 を避て來て韓國を還せたり馬韓其東界れ地を割り  
 接れさて始皇三十二年蒙恬を其地北方濊貊と相  
 を發して長城を築かむ此五年太子扶蘇を以て蒙  
 恬が軍を上郡を監せむ此七年始皇崩宦者趙高乱  
 を起し胡亥を立て扶蘇を死を賜ふと云り然れども

我國れ秦氏始皇三世孝武王れ後をりと云ふ依り扶  
 蘇死せざるかかり逃げて遼を度り來りゆふ也又孝  
 子ゆきて其乱を避て遂に濊貊の地を君ありしを孝  
 武王と云し其也さてかの長城を卒の扶蘇父子の間  
 從來せり者ども馬韓東界れ地を得て奮君は服屬  
 濟し屬し遂に國人を率て我國を來り晋大康  
 の後辰韓れ朝貢絶ありと云れも秦氏我國を來り  
 合王と又諸蕃漢秦忌寸太秦公宿祢同祖秦始皇帝之後  
 也物智王弓月王譽田天皇謚應神十四年來朝上表更  
 歸國率百二十七縣猶姓歸化并献金銀玉帛種々宝物  
 等天皇嘉之賜大和朝津間腋上地居之焉男真徳王次  
 普洞王古記曰云く此れ此文を下引修し物智王を  
 字を百を誤りたり功滿王を新井氏云百二十七縣を百  
 字を猶れ誤りたり又功滿王を猶王と云くたり功滿

○古事記傳三十三

○此六

融通を云々減猪の君を授けりかくて書紀雄略巻下  
十二年秦酒君云々十五年秦民分散臣連等各隨欲駈  
使勿委秦造由是秦造酒甚以為憂而仕於天皇天皇愛  
寵之詔聚秦民賜於秦酒公公仍領率百八十種勝部奉  
獻庸調絹縑充積朝廷因賜姓曰禹豆麻佐一云禹豆母  
利麻佐皆盈  
積之貌也と云々秦民と云々月君が率て來り依り百廿  
七縣の民なり仕字を白をの誤り又此字の上り文  
脱多依り秦酒公を姓氏録に依り見ゆ賜姓を賜  
号と云々秦を依りよやさて此号に意禹豆を今言り毛  
姓を多し積多依り自をを字高保と云々合了万葉  
十五名於布奈流門能守頭之保尔と云依り高き  
潮ときこゆ母利と云依り盛又森をこれ意と同く通  
をて聞ゆ麻佐を即百八十種勝部と云依り勝を依り  
姓氏録諸蕃子勝と云姓も依り又上勝不破勝茨田勝

をい尸も依りて即秦勝と云も依り是らみかか知  
と訓を誤りて麻佐と訓法なり其を韓國に於て一種  
此号に依りて其方にて勝字を用依り麻佐  
流と云訓を取られ借字を依りて勝と云依り麻佐  
秦此字と書何何時右此姓氏録太秦公宿祢條に云々  
仁徳天皇御世以百二十七縣秦氏分置諸郡即使養蚕  
織絹貢之天皇詔曰秦王所献絲綿絹帛朕服用柔軟温  
煖肌膚賜姓波多公秦公酒雄畧天皇御世絲綿絹帛委  
積如岳天皇嘉之賜号曰禹都萬佐秦氏の氏字は民れ  
誤なり依り秦王を  
融通王を詔す依り皇肌膚賜姓波多の六字印本に  
如次登召志と云依り皇誤字と見え解か今古  
写本に依り皇祖此写本も此皇私に改め依り疑  
身に依り皇祖此写本も此皇私に改め依り疑  
膚云々古語拾遺に云所貢絹綿軟於肌膚故訓秦字  
謂之波陀と云依り皇祖此写本も此皇私に改め依り疑

言を取て此名を修り、新井氏も此説を信じて波陀を韓國の語なりと云ふ。古語拾遺右に於て、仍以秦氏所貢絹、繆祭神、又首、今俗猶然、所謂秦機織之縁也矣。又  
秦忌寸條云、男真徳王次普洞王。古記曰、大鷦鷯天  
皇謚仁徳御世賜姓曰波陀、今秦字之訓也。次雲師王次  
武良王普洞王男秦公酒大泊瀬雅武天皇謚雄略御世  
備普洞王時秦氏總被劫畧、今見在者十不存。請遣勅  
使檢括招集、天皇遣使小子部雷率大隅阿多隼人等、搜  
括鳩集得秦氏九十二部一萬八千六百七十八人、遂賜於  
酒爰率秦氏養蚕織絹、盛篋詣闕貢進、如丘如山積、畜朝  
庭、天皇嘉之特降寵命賜号曰禹都萬佐、是盈積有利益

之義、役諸秦氏構八丈大藏於宮側、納其貢物、故名其地  
曰長谷朝倉宮、是時始置大藏官、負以酒為長官、秦氏等  
一祖子孫或就居住、或依行事、別為數腹、天平二十年在  
京畿者咸改賜伊美吉姓也。仁徳御世云、此事書紀  
十三年の如し、百濟王之孫酒君、所於也、秦酒君、此紛  
切、此ゆゑを非ゆゑ、さて此、秦氏やあれ、今を秦民  
の誤を、麻佐を益の意、不見ゆ、此か、こゝを、有利益之義  
と、麻佐を益の意、不見ゆ、此か、こゝを、有利益之義  
了、隨積埋益也、と云ゆ、殊、俗説なり、大藏の事、古語  
拾遺にも見えあり、此と、いさ、か異なり、又欽明紀、  
秦、大津父と云人を、拜大藏省と見え、召集秦人、漢人等  
諸蕃投化者、安置國郡、編貫戸籍、秦人、戸數惣、七千五十  
三戸、以大藏椽為秦、伴造、とあり、此大藏椽を、  
秦、大津父を、伴造、其部、れ長を、  
これか、見え、書紀推古卷、秦造河勝云、因以

造蜂岡寺此寺同卷下葛野秦寺ともあり山城國葛野郡太秦村あり又河勝事種の記あり例の妄説なり皇極卷下葛野秦造河勝をいひつて山城國葛野郡本居ウラスなり同卷哥下此河勝がこをと禹都麻佐波云こともなり續後紀五下山城國人秦宿祢氏繼改本居貫附四條三坊天武卷十二年九月秦造賜姓曰連十四年六月秦連賜姓曰忌寸持統卷十年五月秦造綱手賜姓為忌寸續紀八下秦朝元賜忌寸姓印本朝字下臣字ありを衍なり十四下詔授造宮秦朝元十一卷又懷風藻も見〇錄正八位下秦下嶋麻呂從四位下賜太秦公之名并云云以築大宮垣也宇豆麻佐を案此も名と云姓氏録も号とありを以て姓なり非

とを知修然係亦姓氏録下太秦公宿祢と標らるるは忌寸何の御代下姓なり賜姓なりさて秦下とあり下は忌寸三代實録七下山城國葛野郡人秦忌寸春風秦忌寸諸長等三人賜姓時原宿祢其先秦始皇之後也四十四下元京人秦宿祢永厚秦公直宗山城國葛野郡人秦忌寸永宗右京人秦忌寸越雄元京人秦公直本等男女十九人賜姓惟宗朝臣永厚等自言秦始皇十二世孫功滿王子融通王之苗裔也云率百二十七縣人民譽田天皇十四年歲次癸卯是焉内属也此氏の宿祢よりなり後紀兼和三年起下宿祢と云あり〇漢直之祖漢阿夜と訓ら九て漢を阿夜と云くといかやれ由り詳なり

新井氏那と云々同く此も阿夜と歎く声より出されり。  
此祖多阿智使主及其子都加使主なり。書紀に二十年  
秋九月倭漢直祖阿知使主其子都加使主並率己之黨  
類十七縣而來歸焉と云は是なり。倭と云々河内漢直  
てなり。河内漢直然ゆ。若櫻宮段初に倭漢直之祖  
阿知直書紀に其処に漢直祖阿知使主云々と見え  
又雄畧卷清寧卷に東漢直掬見と云は疑はし。  
應神天皇廿年より履中天皇御世に初る傳は百十餘  
年を経ゆ。阿知使主甚く長壽なり。又此二十年  
十一年より清寧天皇御世に百九十餘年を以て故思  
當都加使主存存在傳に非は即都加なり。故思  
よ此父子が來歸し仁德天皇御世に末の事をりけ

む。其時都加使主は紛らふ。此も應神御世に誤傳  
す。あはれは阿知使主に於ては御世より異國より參來  
來歸し傳はる。混りては御世に傳はる。阿知の雄  
畧御世に參りては國服織の事也。此御世に紛らふ  
依類を至思。さて此氏の事書紀雄畧卷に十六年冬十  
月詔聚漢部定其伴造者賜姓曰直一本云賜漢使主等  
賜姓曰直賜字二つ阿知を賜ふ。行りて非は上さて氏人  
欽明卷に東漢氏直糠兒氏字を宗峻卷に東漢直駒東漢  
直福因東漢直縣孝德卷に倭漢直比羅夫天武卷に六  
六月詔東漢十一年五月倭漢直等賜姓曰連十四年六  
直等曰云云。河内漢直連賜姓曰連十二年九  
月倭漢連河内漢直賜姓曰忌寸。月川内漢直賜姓曰連

と河内是なり。推古、卷下、河内、漢直贄と云人見ゆ。此も此氏の先祖を誰ぞと未考す。若此も共阿知使主の後に此記すも書紀にも阿知使主を倭漢直祖と云れ此を混らけし倭と云る。河内を倭其後非流ごしと聞ゆ。考す。若くは河内形は異人の後、後漢靈帝四世孫阿續紀廿八、坂上大忌寸、荊田知使主之後也。と云。阿續紀廿八、坂上大忌寸、荊田麻呂等上表言、臣等本是後漢靈帝之曾孫。阿智王之後、漢祚遷、魏阿智王因神牛教出行、帶方忽得宝帶、瑞其像似宮城、受建國邑。育其人庶。後召父兄告曰、吾聞東國有聖主、何不歸從乎。若久居此處、恐取覆滅。即携女弟、迂興德及七姓氏、歸化來朝。是則答曰、天皇治天下之御世也。於是阿智王奏請曰、臣舊居在於帶方、人民男女皆有才

藝、近者寓於百濟、高麗之間、心懷猶豫、未知去就。伏願天恩遣使追召之。乃勅遣臣八腹氏、分頭發遣其人男女、落隨使盡來。永為公民。積年累代、以至于今。今在諸國、漢人亦是其後也。臣荊田麻呂等失先祖之王族、蒙下人之卑姓。望請改忌寸、蒙賜宿祢姓。詔許之。坂上内藏平田大藏文調、文部谷民佐、太山口等、忌寸十姓、一十六人、賜姓宿祢。此姓と云れ、十一姓の一字脱れ、其を考す。書紀、欽明、卷下、東漢、坂上、直子、麻呂、推古、卷下、倭漢、坂上、直天武、卷下、坂上、直國、麻呂、坂上、直熊、毛、坂上、直老、など見え。此も漢直れ内をけ故子。天武天皇十四年、忌寸子、をれ、内をけ、かくて續紀廿五、坂上、忌寸、荊田、麻呂、賜姓、坂上、大忌寸、さて今宿祢をれ、協り、此、荊田、麻呂、流をば、大宿祢と云。里、大忌寸の、大を也。が、て、宿祢

見字於一賜字係をいふ事にして文氏の上を係文首  
の延子云る倭漢文直と云氏より皇極紀孝德紀より其  
大見えは時此文直心其内より連なり忌寸  
系形りなり此氏の直上の文首れ延見えと考合  
口宿祢など皆姓氏録に見え坂上大宿祢同祖と  
見調連民首を共百濟國努理使主之後也と見え大  
藏氏之姓氏録右京諸蕃漢坂上大宿祢出自後漢靈帝男  
延王也續後紀七了坂上忌寸續紀卅二了坂上大忌寸  
苧田麻呂等言以檜前忌寸任大和國高市郡司元由者  
先祖阿智使主輕嶋豐明宮馭宇天皇御世率十七縣人  
夫歸化詔賜高市郡檜前村而居焉九高市郡内者檜前  
忌寸及十七縣人夫滿地而居他姓者十而一二焉云々

姓氏録子檜前忌寸坂上大  
宿祢同祖阿智王之後也 卅七了倭漢忌寸木津吉人  
等八人言吉人等是阿智使主之後也云除倭漢二字為  
木津忌寸許之姓氏録了木津忌寸後漢靈續後紀一了  
山田造古嗣大藏忌寸横佩内藏忌寸秀嗣等並賜宿祢  
姓就中横佩秀嗣之先出自後漢靈帝曾孫阿智王泊蒼  
田天皇馭寓之年歸化者也三代實録六了大藏伊美吉  
廣勝賜姓宿祢後漢孝靈皇帝四代孫阿智使主後與坂  
上大宿祢同祖也了坂上伊美吉能文坂上伊美吉斯  
文等九了賜姓坂上宿祢後漢孝靈皇帝四代孫阿智使  
主之裔與坂上大宿祢同祖也了見え姓氏録了

此同祖の氏、彼此<sup>コカレ</sup>所<sup>カ</sup>を、醫<sup>イ</sup>の名高き丹波氏も。○知<sup>チ</sup>釀<sup>カウラ</sup>

酒<sup>ミキ</sup>とく、世子<sup>スガ</sup>勝<sup>カ</sup>きて善<sup>ヨク</sup>釀<sup>カム</sup>を云<sup>イ</sup>ふ所<sup>ト</sup>也<sup>ナリ</sup>。知<sup>チ</sup>々<sup>カ</sup>巧<sup>カウ</sup>手<sup>テ</sup>なり。

一<sup>ヒト</sup>なるを、下<sup>シタ</sup>卷<sup>マキ</sup>なり。上<sup>ウヘ</sup>手<sup>テ</sup>形<sup>カタ</sup>なり。○仁<sup>ニ</sup>番<sup>バン</sup>々<sup>カ</sup>亦<sup>モ</sup>富<sup>ホ</sup>と讀<sup>ヨミ</sup>ゆ。

上<sup>ウヘ</sup>に照<sup>テ</sup>古<sup>コ</sup>卓<sup>タク</sup>素<sup>ソ</sup>西<sup>セイ</sup>素<sup>ソ</sup>をど<sup>ノ</sup>の例<sup>レイ</sup>なり。此<sup>コノ</sup>も字<sup>ジ</sup>音<sup>オン</sup>の<sup>ミ</sup>ず<sup>ク</sup>なり。二<sup>ニ</sup>

ノホ<sup>ニ</sup>と<sup>ト</sup>も讀<sup>ヨミ</sup>ゆ<sup>ル</sup>なり。九<sup>ク</sup>て<sup>テ</sup>ノ<sup>ノ</sup>韻<sup>オン</sup>々<sup>カ</sup>正<sup>テイ</sup>し<sup>シ</sup>か<sup>カ</sup>り<sup>リ</sup>。二<sup>ニ</sup>

声<sup>セイ</sup>を<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>て古<sup>コ</sup>々<sup>カ</sup>り<sup>リ</sup>省<sup>セイ</sup>く<sup>ク</sup>例<sup>レイ</sup>多<sup>タ</sup>きを是<sup>コト</sup>を<sup>ヲ</sup>殊<sup>ジュ</sup>子<sup>シ</sup>ニ<sup>ニ</sup>重<sup>ジュウ</sup>な

りて<sup>テ</sup>聞<sup>ク</sup>苦<sup>ク</sup>し<sup>シ</sup>を<sup>ヲ</sup>波<sup>ハ</sup>と<sup>ト</sup>讀<sup>ヨミ</sup>ゆ<sup>ル</sup>なり。此<sup>コノ</sup>字<sup>ジ</sup>も<sup>モ</sup>蕃<sup>ハン</sup>字<sup>ジ</sup>也<sup>ナリ</sup>。記<sup>キ</sup>

中<sup>ナカ</sup>に<sup>ニ</sup>ホ<sup>ノ</sup>の假<sup>カ</sup>字<sup>ジ</sup>不<sup>フ</sup>用<sup>ヨウ</sup>を<sup>ヲ</sup>附<sup>ツ</sup>表<sup>ヒヤウ</sup>反<sup>ハン</sup>な<sup>レ</sup>ば<sup>バ</sup>、吳<sup>ウ</sup>音<sup>オン</sup>ホ<sup>ノ</sup>ニ<sup>ニ</sup>なり。○

須<sup>ス</sup>く<sup>ク</sup>許<sup>コ</sup>理<sup>リ</sup>此<sup>コノ</sup>人<sup>ノ</sup>の事<sup>ノ</sup>書<sup>ノ</sup>紀<sup>キ</sup>り<sup>リ</sup>も、其<sup>ソノ</sup>餘<sup>カ</sup>の古<sup>コ</sup>書<sup>ノ</sup>も<sup>モ</sup>見<sup>ミ</sup>え<sup>タ</sup>る。

但<sup>シ</sup>姓<sup>セイ</sup>氏<sup>シ</sup>録<sup>ロク</sup>酒<sup>シュ</sup>部<sup>ブ</sup>公<sup>コウ</sup>條<sup>ジョウ</sup>云<sup>ク</sup>、大<sup>ダイ</sup>鷲<sup>リウ</sup>鷲<sup>リウ</sup>天<sup>テン</sup>皇<sup>ス</sup>御<sup>ミ</sup>代<sup>ダイ</sup>從<sup>ジュウ</sup>韓<sup>カン</sup>國<sup>クニ</sup>參<sup>サン</sup>

来<sup>キ</sup>人<sup>ニ</sup>兄<sup>ケイ</sup>曾<sup>ソウ</sup>く<sup>ク</sup>保<sup>ホ</sup>利<sup>リ</sup>弟<sup>テイ</sup>曾<sup>ソウ</sup>く<sup>ク</sup>保<sup>ホ</sup>利<sup>リ</sup>二<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>天<sup>テン</sup>皇<sup>ス</sup>勅<sup>トク</sup>有<sup>ル</sup>何<sup>ニ</sup>才<sup>ノ</sup>皆<sup>ハ</sup>有<sup>ル</sup>

造<sup>ゾウ</sup>酒<sup>シュ</sup>之<sup>ノ</sup>才<sup>ノ</sup>令<sup>ラ</sup>造<sup>ゾウ</sup>御<sup>ミ</sup>酒<sup>シュ</sup>云<sup>ク</sup>、此<sup>コノ</sup>文<sup>ノ</sup>の事<sup>ノ</sup>傳<sup>デン</sup>廿<sup>ニ</sup>六<sup>ノ</sup>の廿<sup>ニ</sup>四<sup>ノ</sup>と<sup>ナリ</sup>。

保<sup>ホ</sup>曾<sup>ソウ</sup>く<sup>ク</sup>保<sup>ホ</sup>利<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>同<sup>トシ</sup>人<sup>ニ</sup>れ<sup>レ</sup>如<sup>ニ</sup>聞<sup>ク</sup>ゆ<sup>レ</sup>を、須<sup>ス</sup>く<sup>ク</sup>と<sup>ト</sup>曾<sup>ソウ</sup>く<sup>ク</sup>と<sup>ト</sup>通<sup>ツ</sup>す。

仁<sup>ニ</sup>德<sup>トク</sup>天<sup>テン</sup>皇<sup>ス</sup>御<sup>ミ</sup>代<sup>ダイ</sup>と<sup>ト</sup>所<sup>ト</sup>れ<sup>レ</sup>る<sup>ル</sup>傳<sup>デン</sup>の異<sup>イ</sup>を<sup>ヲ</sup>依<sup>ヨ</sup>り<sup>テ</sup>所<sup>ト</sup>れ<sup>レ</sup>る<sup>ル</sup>。又<sup>マタ</sup>字<sup>ジ</sup>

醜<sup>シウ</sup>須<sup>ス</sup>く<sup>ク</sup>保<sup>ホ</sup>利<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>所<sup>ト</sup>れ<sup>レ</sup>る<sup>ル</sup>其<sup>ソノ</sup>義<sup>イ</sup>詳<sup>セウ</sup>な<sup>リ</sup>。又<sup>マタ</sup>同<sup>トシ</sup>書<sup>ノ</sup>子<sup>シ</sup>醜<sup>シウ</sup>營<sup>エイ</sup>也<sup>ナリ</sup>。

營<sup>エイ</sup>は酒<sup>シュ</sup>失<sup>シツ</sup>也<sup>ナリ</sup>と<sup>ト</sup>注<sup>チュウ</sup>す。須<sup>ス</sup>く<sup>ク</sup>許<sup>コ</sup>理<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>音<sup>オン</sup>通<sup>ツ</sup>す<sup>ル</sup>も<sup>モ</sup>醜<sup>シウ</sup>營<sup>エイ</sup>也<sup>ナリ</sup>。

造<sup>ゾウ</sup>吳<sup>ウ</sup>國<sup>クニ</sup>人<sup>ニ</sup>太<sup>タイ</sup>利<sup>リ</sup>須<sup>ス</sup>く<sup>ク</sup>之<sup>ノ</sup>後<sup>ノチ</sup>也<sup>ナリ</sup>。上<sup>ウヘ</sup>勝<sup>ショウ</sup>百<sup>ヒャク</sup>濟<sup>セイ</sup>國<sup>クニ</sup>人<sup>ニ</sup>多<sup>タ</sup>利<sup>リ</sup>須<sup>ス</sup>く<sup>ク</sup>之<sup>ノ</sup>後<sup>ノチ</sup>也<sup>ナリ</sup>。

也<sup>ナリ</sup>。後<sup>ノチ</sup>也<sup>ナリ</sup>。高<sup>コウ</sup>安<sup>アン</sup>漢<sup>カン</sup>人<sup>ニ</sup>猶<sup>ナド</sup>國<sup>クニ</sup>人<sup>ニ</sup>小<sup>コウ</sup>須<sup>ス</sup>く<sup>ク</sup>之<sup>ノ</sup>後<sup>ノチ</sup>也<sup>ナリ</sup>。酒<sup>シュ</sup>釀<sup>ラウ</sup>香<sup>カウ</sup>市<sup>シ</sup>下<sup>ゲ</sup>子<sup>シ</sup>私<sup>シ</sup>

記<sup>キ</sup>曰<sup>ク</sup>師<sup>シ</sup>說<sup>セツ</sup>高<sup>コウ</sup>麗<sup>レイ</sup>人<sup>ニ</sup>來<sup>キ</sup>住<sup>ジ</sup>餌<sup>ニ</sup>香<sup>カウ</sup>市<sup>シ</sup>釀<sup>ラウ</sup>昔<sup>セキ</sup>酒<sup>シュ</sup>時<sup>ジ</sup>人<sup>ニ</sup>競<sup>ケイ</sup>以<sup>テ</sup>高<sup>コウ</sup>價<sup>ケン</sup>買<sup>バイ</sup>

飲<sup>イン</sup>故<sup>コ</sup>云<sup>ク</sup>と<sup>ト</sup>云<sup>ク</sup>保<sup>ホ</sup>曾<sup>ソウ</sup>く<sup>ク</sup>保<sup>ホ</sup>利<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>許<sup>コ</sup>理<sup>リ</sup>の事<sup>ノ</sup>を<sup>ヲ</sup>傳<sup>デン</sup>す<sup>ル</sup>云<sup>ク</sup>保<sup>ホ</sup>曾<sup>ソウ</sup>く<sup>ク</sup>保<sup>ホ</sup>利<sup>リ</sup>と<sup>ト</sup>同<sup>トシ</sup>人<sup>ニ</sup>れ<sup>レ</sup>如<sup>ニ</sup>聞<sup>ク</sup>ゆ<sup>レ</sup>を、須<sup>ス</sup>く<sup>ク</sup>と<sup>ト</sup>曾<sup>ソウ</sup>く<sup>ク</sup>と<sup>ト</sup>通<sup>ツ</sup>す。

參<sup>サン</sup>渡<sup>ト</sup>来<sup>キ</sup>これ<sup>レ</sup>も<sup>モ</sup>秦<sup>シン</sup>造<sup>ゾウ</sup>祖<sup>ソ</sup>漢<sup>カン</sup>直<sup>チ</sup>祖<sup>ソ</sup>仁<sup>ニ</sup>番<sup>バン</sup>形<sup>カタ</sup>也<sup>ナリ</sup>。子<sup>シ</sup>云<sup>ク</sup>なり。○

上<sup>ウヘ</sup>に保<sup>ホ</sup>内<sup>ナイ</sup>なり。非<sup>ヒ</sup>也<sup>ナリ</sup>。此<sup>コノ</sup>御<sup>ミ</sup>世<sup>セ</sup>に<sup>ニ</sup>自<sup>ミ</sup>參<sup>サン</sup>渡<sup>ト</sup>来<sup>キ</sup>形<sup>カタ</sup>也<sup>ナリ</sup>。

故是須須許理釀大御酒以獻カレコノス、コリオホミキラカミテタテツリキ。

於是天皇宇羅宜是所獻之大コ、ニスマラミコトコノタテマツレルオホミキニ

御酒而。宇羅宜三御歌曰。須須ウラゲテ。字以音。三ウタハレケラクス、

許理賀迦美斯美岐邇和禮惠コリガカミシメキニワレエ

比邇祁理許登那具志惠具志ヒニケリコトナグシエグシ

爾和禮惠比邇祁理如此之歌ニワレエヒニケリカクウタハレツ、

幸行時以御杖打大坂道中之イデニセルトキニミツエモチテオホサカノミチナカナルオホイシラ

大石者其石走避故諺曰堅石ウチタマヒレカバソノイシハシリサリヌカレコトワザニカタレハモ

避醉人也エヒビトラサルトゾイフナル

宇羅宜をまぐるろこ心おろろく浮立を云と聞ゆ若  
櫻宮段も於大御酒宇羅宜而大御寢坐也也見え出

雲風土記 仁多郡三 大神大穴持命御子阿遲須伎高

日子命御須髮八握于生晝夜哭坐之辞不通尔時祖神

御子乘船而率巡八十嶋宇良加志給鞞猶不止哭之と

毛 宇羅宜を云て此を哭を止て宇羅宜給ふ

く 此を契冲云世よ幼き兒をてうらかんと

須許理賀 契冲此名を此若和語をば煤疑をれ

記 云櫛八玉命云くと云ゆを由を煤疑と云と

録 も見えと云ゆ違り ○迦美斯美岐迹々

釀一御酒をなり ○和礼惠比迺祁理を吾醉より

万葉六八丁 大夫之禱豊御酒尔吾醉尔家里 ○許

登那具志事酒を和を慰む云万葉八二丁

情奈具夜登十一丁 念之情今曾水葱少熱十五丁

安我毛敝流許己呂奈具也等十七丁 許己太久

母之氣伎孤悲可毛奈具流日毛奈久十八丁 左加美

都伎安蘇比奈具礼止をやゆれ皆慰むを 和と云

て意同し又丹後國風土記日天女八人降来云爰天

女善為釀酒飲一盃吉万病除云復至竹野郡船木里奈

具村即謂村人等云此處我心奈具志久 古事平善者 乃

留居此村斯所謂竹野郡奈具社坐豊宇賀能賣命也 此

釀酒と奈具志久を別事して相離らぬゆをれと

も 此哥と合せて思はず実系釀酒事も由ゆ

を知らず。神名式。丹後國竹野郡奈具神社。さて大神  
宮儀式帳。味酒。鈴鹿國。須く許理。てふ名の須くと  
由。神名式。那久。さて此御句を諸の憂事。哀事。和さ  
志里神社。許登那具。久志を。具久と同音  
の重なり。海。一。省。海。なり。九て同音の重なり。海  
上。久志を酒。比。海。と。大右御段の御哥。久志  
能加美。と。下。小。奉。あ。横井。千秋の考。小。依。なり。傳  
一の四考。合。海。一。此。維。句。を。契。沖。許。登。言。なり。那。大  
十二葉。考。合。海。一。此。維。句。を。契。沖。許。登。言。なり。那。大  
御酒。さ。く。と。云。海。を。い。ふ。非。ぞ。  
云。久志を酒。比。海。と。大右御段の御哥。久志  
能加美。と。下。小。奉。あ。横井。千秋の考。小。依。なり。傳  
一の四考。合。海。一。此。維。句。を。契。沖。許。登。言。なり。那。大  
十二葉。考。合。海。一。此。維。句。を。契。沖。許。登。言。なり。那。大  
御酒。さ。く。と。云。海。を。い。ふ。非。ぞ。  
云。久志を酒。比。海。と。大右御段の御哥。久志  
能加美。と。下。小。奉。あ。横井。千秋の考。小。依。なり。傳  
一の四考。合。海。一。此。維。句。を。契。沖。許。登。言。なり。那。大  
十二葉。考。合。海。一。此。維。句。を。契。沖。許。登。言。なり。那。大  
御酒。さ。く。と。云。海。を。い。ふ。非。ぞ。

を。久。志。と。云。海。と。云。海。と。常。多。一。契。沖。の。咲。苦。き。なり。也。  
師云。大御酒。酔。賜。て。御心の萬。れ。御思。も。和。さ。坐。  
咲。坐。よ。一。なり。○如此之。歌。之。字。例。を。置。け。り。を。誤。  
志。都。と。訓。修。一。字。を。無。き。も。必。然。可。れ。修。き。勢。  
を。海。起。形。也。上。を。海。之。字。若。く。也。○幸。行。を。大。御。酒。に。酔。  
給。て。御。心。を。立。て。何。處。と。許。す。も。な。く。ま。ら。る。幸。  
垣。宮。段。に。出。て。大。和。國。に。河。内。國。を。越。海。坂。形。り。彼。起。  
よ。委。云。里。傳。北。五。の。○大。石。を。打。賜。り。酔。坐。海。故。の。御。  
○古事記傳三十三  
○四十六

態なり。○走避を痛く打奉らざるとして情以れ物れ如  
く小逃避をなり。○諺を止巻子出傳  
三の三 ○堅石を師の迦多志波と訓き此は宜し書紀  
十九葉 雄畧卷は堅磐此云柯陀之波と云はれ此をめぐり石  
と云はれ堅と云はれ石はいかに打ゆきても  
痛むともなく傷多と云はれ堅き物なれ其堅き  
石をめぐると云意なりかて諺云はれ意を凡て酒子醉  
乱き人なり正心なりぬ如何をれかかざせむ  
も測りて云はれ堅き石をめぐり恐る避ゆなれ必恐  
避て避ゆきそのせとの譬を引て云はれ凡て諺  
とて挙

あゆみ皆たり其時の事を云はれ非物れ  
譬を引て云はれ其由上巻をれ之頓使玉垣  
宮段を依不得地玉作をの諺の袋冊子夜行途中  
下りも云はれ如し考合をせし  
誦文の哥かこはや然るせりよくと云はれ酒手忍  
む足忍い我酔よまると云はれ是れ此の御故事をの免  
るし聞也。二の句はかたは誤り御杖をて大  
手あさみし給ふことと云はれ手酔を幸行せ  
ゆことなりと云はれ心得の免れ誤りて此を  
夜行此誦文とせし物も我を恐るて逃避て近ゆと  
の意なり  
云はれ

カレ スメラミコトカムアカリミテノチニ。オホサキノミコトハ。サキノオホ  
故天皇崩之後大雀命者從天

皇之命。以天下讓宇遲能和紀

郎子。於是大山守命者。違天皇

之命。猶欲獲天下。有殺其弟皇

子之情。竊設兵將攻爾大雀命。

聞其兄備兵。即遣使者。令告宇

遲能和紀郎子。故聞驚。以兵伏

河邊。亦其山之上。張純垣立帷

幕。詐以舍人為王。露坐。具床百

官。恭敬往來之狀。既如王子之

坐所。而更為其兄王渡河之時。

フネカチヲソナヘカザリ。マタサナナ  
具。饒船。檝者。舂佐那。此二字カツラノ葛

之根。取其汁。滑而塗其船中之

箒。椅設。踏應。仆而其王子者。服

布衣。禪既為賤人之形。執檝立

船。於是其兄王。隱伏兵士。夜中

服鎧。到於河邊。將乘船時。望其

嚴饒之處。以為弟王坐其吳床。

都。不知執檝而立船。即問其執

檝者曰。傳聞茲山有忿怒之大

猪。吾欲取其猪。若獲其猪乎。爾

トレルモノエエタマハジトイヘバ。マタイカナレトトヒ  
執楫者。答曰不能也。亦問曰何  
由。答曰時時也。往往也。雖爲取  
而不得。是以白不能也。渡到河  
中之時。令傾其船。墮入水中。爾  
乃浮出。隨水流下。即流歌曰。知

スナハチウキイデ、ミヅニニクナガレクダリタミヒキスナハチナガレツ、ウタヒタハク

ハヤブルウチノワタリニサ  
波夜夫流。宇遲能和多理邇佐  
ヲトリニハヤケムヒトシワ  
袁斗理邇波夜祁牟比登斯和  
ガモコニコムムコ、ニカハベニカクレタル  
賀毛古邇許牟。於是伏隱河邊  
イクサビトカナタコナタモロトモニオコリテヤサシ  
之兵。彼廂此廂。一時共興矢刺  
テナガレキカレカワラノサキニイタリテ、ミヅニイリタミヒマ  
而流。故到訶和羅之前。而沈入

訶カレ和カギヲモチテソノ羅レツミタミヒントヨヲサグリレカバ三カレ故カレ以カレ鉤カレ探カレ其カレ沈カレ處カレ者カレ。

字ソノコロモノウチナルヨロヒニカ、リテ以カ音ワ故ラトナリキ以カレ鉤ソコ探ソノコロモノウチナルヨロヒニカ、リテ其カ沈ワ處ラトナリキ者カレ。

繫ソノコロモノウチナルヨロヒニカ、リテ其カ衣ワ中ラトナリキ甲カレ而ソコ訶ソノコロモノウチナルヨロヒニカ、リテ和カ羅ワ鳴ラトナリキ故カレ號ソコ。

其ノナヲカワラノサキトハイフナリ。コ、ニソノカバネヲ地カ謂カ訶カ和ワ羅ラ前ニ也ニ爾ニ掛ニ出ニ其ニ。

骨カキイダセルトキニ之オトミコノ時ミウタ弟チ王ハ歌ヤ曰ヒ知ト波ト夜ト比ト登ト。

宇ウ遲ヂ能ノ和ワ多タ理リ邇ニ和ワ多タ理リ是セ邇ニ。

多タ豆テ流ル阿ア豆ヅ佐サ由ユ美ミ麻マ由ユ美ミ伊イ。

岐キ良ラ牟ム登ト許コ許ハ呂ロ波ハ母モ閑ヘ杼ド伊イ。

斗ト良ラ牟ム登ト許コ許ハ呂ロ波ハ母モ閑ヘ杼ド母モ。

登ト幣ヘ波ハ岐キ美ミ袁ヲ淤オ母モ比ヒ傳デ須ス惠エ。

幣ヘ波ハ伊イ毛モ袁ヲ淤オ母モ比ヒ傳デ伊イ良ラ那ナ。

祁久曾許爾淤母比傳加那志  
ケクソコニオモヒデカナシ  
 祁久許許爾淤母比傳伊岐良  
ケククコニオモヒデイキラ  
 受曾久流阿豆佐由美麻由美  
ズゾククルアツサユミマユミ  
 故其大山守命之骨者葬于那  
カレソノオホヤマモリノミコトノミカバネヲバナラヤマニ  
 良山也是大山守命者  
カクシキコノオホヤマモリノミコトハヒヂカタノキミ  
 幣岐君  
ヘキノキミ

榛原君  
ハリハラノキミ  
 等之祖  
ラガオヤナリ

天皇崩之書紀云四十二年春二月甲午朔戊申天皇崩  
 于明宮アキラノミヤ云崩于大隅宮オホノミヤと云云。大隅宮之難波子あり。○天皇  
 之命を佐伎能意富美許登と訓修。天皇を字たり。  
 訓てを此は上をれと重なりて煩はしむるはなり。  
 さて此を上に見えしれ大山守命と大雀命と宇遲能  
 和紀即子と三柱太子。御詔別れ大命なり。○讓を大  
 雀命も共う皇太子ヒツギノミコ坐スが故なり。此言を以ても三柱  
 ながら皇太子ミコ坐スしをシ知ルる。書紀の如く  
 宇遲王の太子

坐むふと。天下はも叱り其王れ治まれば大  
雀命の譲りよと云く由なり。共太子坐す故  
譲り賜由豆流と云く避ゆを云。三柱御子共  
ふ形り。天下所知者。然も。天皇の佛足石  
大命有子因て宇遲王地避り聞え給ふなり。佛足石  
哥よ由豆利麻都良牟書紀仁徳卷初云時太子菟道稚  
郎子讓位于大鷦鷯尊未即帝位仍諮大鷦鷯尊云く大  
鷦鷯尊對言云く固辞不兼各相讓之。此相讓賜る御  
言の文長。さ  
當昔れ語よゆ。皆例の漢意。○大山守命者云く  
の潤色の文ゆと云く。ゆさ。○大山守命者云く  
書紀云是時額田大仲彦皇子將掌倭屯田及屯倉云然  
後大山守皇子每恨先帝廢之非立而重有是怨則謀之  
曰我殺太子遂登帝位。是怨と云。倭れ屯田屯倉の事な  
額田大仲彦皇子と御同母兄

○弟皇子を宇遲王なりさて御子を皇子と  
記中此を除て例なり。玉垣宮段又此下  
書又王子と書ゆと云く。王子をりむす書紀は目なれぬ  
後の人ふと写。○竊て師れ志怒比爾と訓き了れ宜  
○兵を師の伊久佐毘登と訓き了れ宜し下をゆも  
皆同ト。○尔大雀命云く書紀云爰大鷦鷯尊預聞其謀  
密告太子備兵令守。○遣使者と宇遲王れ御許よ山城  
國宇遲り遣りなり。此王を宇遲り住坐し。○河辺を宇  
遲川れ辺なり。○伏を加久志と訓き了れ下よ伏隱河辺  
之兵と云れ是なり。書紀天武卷も伏兵と云り。○其

山を宇遲山なり。○絶垣を絶を長く引延て垣の如く

立隔於庭云大神宮儀式帳新宮遷奉儀式行事人

垣立豆夜垣曳豆蓋刺羽等捧豆幸行と云。今世も

物垣とて此。○帷幕ハ阿宜波理と訓治し和名抄小四声

字苑云幄大帳也和名阿計波利書記齊明卷下張紺幕

於此宮地と云。繼躰卷下帷幕をキヌクと訓和名

字音とこそ聞ゆれ又帷幕和名加太比良と云れど此は

帷と幕と二つを非比二字を連移て一物と訓治さな

る初ねる帷幕と云ふきよ字を故に云注ゆり又斗婆

と云るを比良波利帷ハ阿計波利幔を万多良万玖帟

と云るを比良波利帷ハ阿計波利幔を万多良万玖帟

と云るを比良波利帷ハ阿計波利幔を万多良万玖帟

と云るを比良波利帷ハ阿計波利幔を万多良万玖帟

と云るを比良波利帷ハ阿計波利幔を万多良万玖帟

と云るを比良波利帷ハ阿計波利幔を万多良万玖帟

と云るを比良波利帷ハ阿計波利幔を万多良万玖帟

と云るを比良波利帷ハ阿計波利幔を万多良万玖帟

と云るを比良波利帷ハ阿計波利幔を万多良万玖帟

と云るを比良波利帷ハ阿計波利幔を万多良万玖帟

士三十人。新田部親王。内舍人二人。大舍人四人。衛士二十人。を賜ふ。と見え。其舍人以供左右。雜使。衛士。以充行路防禦。とあり。臣の家。この後。此稱無し。續紀。五子。左大臣。舍人見え。とあり。後の事を。此を。宇遲王。孔舍人。なり。名義を。殿侍。う。能波。向を。切む。意を。上卷傳十四の四十四葉。云る。如。一。万葉二。日並。皇子。尊。宮。舍人。等。哥。よ。東の。さ。ぎ。れ。御。門。よ。伺。侍。了。と。昨日。も。今日。も。召。こ。と。し。を。一。又。今。一。の。考。ル。あり。其。を。下。り。云。修。師。の。殿。守。と。云。意。を。り。と。云。せ。う。と。殿。守。は。本。と。云。て。別。を。り。書。紀。よ。帳。内。官。者。兵。衛。を。と。り。漢。國。官。者。と。云。物。を。皇。朝。に。無。し。され。と。仕。奉。添。さ。ゆ。を。登。祿。理。と。似。と。ゆ。と。あり。又。兵。衛。を。登。祿。理。よ。正。し。く。當。ら。親。近。左。右。之。通。稱。也。後。為。官。也。云。る。此。意。を。以。て。り。舍。人。と。云。祿。理。周。禮。に。用。ゆ。右。の。漢。書。注。よ。云。添。意。を。以。て。り。方。子。登。祿。理。に。用。ゆ。右。の。漢。書。注。よ。云。添。意。を。以。て。り。後。為。官。と。云。又。や。後。よ。大。舍。人。と。云。あり。此。名。書。紀。雄。畧。

卷より始て見え。職負令。左右大舍人寮ありて。大舍人八百人と見え。集解。弘仁十年。減して四百人。子定。見ゆ。内舍人と云。あり。同令中務省の下。内。衛。供。奉。雜。使。若。駕。行。分。衛。前。後。と。あり。大。宝。元。年。よ。始。て。置。せ。り。と。續。紀。よ。見。ゆ。久。安。四。年。内。舍。人。六。十。人。子。定。免。り。太子。内舍人と云。あり。太子の官を。隋。又。東。宮。職。負。令。り。も。舍。人。監。あり。て。其。下。よ。舍。人。六。百。人。と。あり。さ。て。又。刀。祿。と。云。祿。あり。此。を。舍。人。と。り。本。より。別。を。り。廣。大。忌。祭。祝。詞。よ。王。等。臣。等。百。官。人。等。倭。國。乃。六。御。縣。能。刀。祿。男。女。亦。至。万。豆。云。く。龍。田。祭。祝。詞。に。か。く。あり。續。後。記。九。日。公。卿。百。官。及。刀。祿。等。了。諸。祝。刀。祿。等。西。宮。記。五。月。五。日。條。に。釋。奠。條。に。上。卿。宣。云。刀。祿。奉。入。禮。与。諸。大。夫。以。下。列。入。了。釋。奠。條。に。上。卿。宣。云。刀。祿。奉。入。禮。与。諸。大。夫。以。下。下。入。了。南。門。了。九。日。宴。條。に。伊。世。之。末。乃。安。万。乃。止。云。祿。良。可。太。欠。保。乃。評。大。神。宮。儀。式。帳。小。二。箇。郡。司。子。弟。及。



○吳床之師の阿具良と訓せしゆ宜し下文にも見え  
又朝倉宮段は。大御吳床とも御吳床とも巧里上卷天  
若日子段は。胡床と云はれ同物なり。胡と吳との字は  
とをり。又和名抄は。牙床久礼度。大神宮儀式帳荒祭宮  
古と云も巧里と其の巧里は。大神宮儀式帳荒祭宮  
装束は。吳床一具。漆塗長二尺三寸。と云はる。此物に事彼胡  
床の下は云はれ如し。傳十九葉。○坐を麻世豆と訓は  
麻佐世を切えて。麻世と云はる。舎人を坐せども。王は為  
たはと云はる。は。かく崇多と云はれ言以て云はる。○百官  
と云はる。都加佐豆加佐と訓はる。續紀九宣命は。官人等  
巧り。大被詞は。天皇我朝廷尔仕奉。官人等。巧り。

書紀は。百官百僚有司など皆如此訓はる。又この訓  
も。さる天皇既之崩して守遷王未位は。是即賜はざれ  
ども。天津日嗣所看。後御子に坐して。世爲朝廷は百  
官の仕奉むも。然は云はる。此をめぐ皇太  
子に属はる。司を云はる。百官の字は。非  
代。下卷若櫻官段は。御弟水齒別命の曾婆加理を欺き  
給ふは。延不賜大臣位。百官念拜と云はる。又  
異は。延不賜大臣位。百官念拜と云はる。又  
を彼延不賜大臣位。百官念拜と云はる。又  
も。延不賜大臣位。百官念拜と云はる。又  
か。延不賜大臣位。百官念拜と云はる。又  
礼神礼賢など。延不賜大臣位。百官念拜と云はる。又  
協宜し。○既を盡なり。此をさながらと云はる。通る。

かゝるも盡<sup>ツ</sup>下<sup>ニ</sup>を<sup>シ</sup>ゆも同<sup>シ</sup>○如<sup>ク</sup>是<sup>レ</sup>碁<sup>ゴ</sup>登<sup>ト</sup>斯<sup>レ</sup>三<sup>テ</sup>と訓<sup>ハ</sup>修<sup>シ</sup>。如<sup>ク</sup>  
の意<sup>ヲ</sup>なり。○如<sup>ク</sup>是<sup>レ</sup>碁<sup>ゴ</sup>登<sup>ト</sup>斯<sup>レ</sup>三<sup>テ</sup>と訓<sup>ハ</sup>修<sup>シ</sup>。如<sup>ク</sup>  
く<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>ての意<sup>ヲ</sup>なり。為<sup>レ</sup>て<sup>ト</sup>も然<sup>ラ</sup>為<sup>レ</sup>ゆを云<sup>フ</sup>。○元<sup>ア</sup>王<sup>ニ</sup>を<sup>シ</sup>六<sup>ニ</sup>  
山<sup>ノ</sup>守<sup>リ</sup>命<sup>ヲ</sup>なり。○渡<sup>リ</sup>河<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>攻<sup>メ</sup>来<sup>ル</sup>多<sup>ク</sup>む時<sup>ノ</sup>の事<sup>ヲ</sup>なり。○為<sup>レ</sup>此<sup>ノ</sup>  
字<sup>ヲ</sup>諸<sup>ノ</sup>本<sup>ヨリ</sup>脱<sup>キ</sup>多<sup>ク</sup>今<sup>キ</sup>真<sup>ニ</sup>福<sup>ノ</sup>寺<sup>ノ</sup>本<sup>ニ</sup>延<sup>テ</sup>佳<sup>ク</sup>本<sup>ヨリ</sup>依<sup>リ</sup>多<sup>ク</sup>り。○船<sup>ノ</sup>  
楫<sup>者</sup>を<sup>シ</sup>者<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>亦<sup>テ</sup>字<sup>ヲ</sup>と誤<sup>リ</sup>多<sup>ク</sup>りゆ<sup>ニ</sup>依<sup>ル</sup>多<sup>ク</sup>り。○章<sup>ノ</sup>書<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>相<sup>シ</sup>似<sup>ト</sup>多<sup>ク</sup>  
了<sup>ラ</sup>然<sup>ラ</sup>云<sup>フ</sup>故<sup>ニ</sup>船<sup>ノ</sup>楫<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>也<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>法<sup>ヲ</sup>字<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>楫<sup>者</sup>を<sup>シ</sup>安<sup>ク</sup>此<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>  
法<sup>ヲ</sup>字<sup>ヲ</sup>非<sup>ズ</sup>且<sup>ツ</sup>且<sup>ツ</sup>饒<sup>ト</sup>と云<sup>フ</sup>ゆも楫<sup>者</sup>字<sup>ヲ</sup>は似<sup>テ</sup>教<sup>ハ</sup>か何<sup>レ</sup>も  
多<sup>ク</sup>て此<sup>ノ</sup>次<sup>ニ</sup>亦<sup>テ</sup>云<sup>フ</sup>言<sup>ハ</sup>必<sup>ズ</sup>ゆ<sup>レ</sup>れ法<sup>ヲ</sup>字<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>知<sup>ル</sup>を<sup>シ</sup>れ<sup>ル</sup>多<sup>ク</sup>り  
故<sup>ニ</sup>布<sup>ヲ</sup>泥<sup>ヲ</sup>加<sup>ヘ</sup>遲<sup>ク</sup>と訓<sup>ハ</sup>て者<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>は下<sup>ニ</sup>屬<sup>ス</sup>て麻<sup>ノ</sup>多<sup>ク</sup>と訓<sup>ハ</sup>修<sup>シ</sup>。書<sup>ノ</sup>  
紀<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>武<sup>ノ</sup>卷<sup>ノ</sup>も備<sup>フ</sup>舟<sup>ノ</sup>楫<sup>ト</sup>とゆ<sup>ル</sup>。○佐<sup>ナ</sup>那<sup>ノ</sup>葛<sup>ヲ</sup>和<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>抄<sup>シ</sup>。蘇

敬<sup>ニ</sup>本<sup>ノ</sup>草<sup>ノ</sup>注<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>五<sup>ノ</sup>味<sup>ノ</sup>皮<sup>ノ</sup>肉<sup>ノ</sup>甘<sup>ノ</sup>酸<sup>ノ</sup>核<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>辛<sup>ク</sup>苦<sup>ク</sup>都<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>鹹<sup>ノ</sup>味<sup>ノ</sup>故<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>五<sup>ノ</sup>  
味<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>和<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>作<sup>リ</sup>祢<sup>カ</sup>加<sup>カ</sup>豆<sup>ツ</sup>良<sup>ラ</sup>とゆ<sup>ル</sup>字<sup>ヲ</sup>鏡<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>籍<sup>ハ</sup>左<sup>ニ</sup>奈<sup>ノ</sup>葛<sup>ヲ</sup>と<sup>シ</sup>  
木<sup>ノ</sup>防<sup>己</sup>佐<sup>ナ</sup>奈<sup>ノ</sup>葛<sup>ヲ</sup>と<sup>シ</sup>ゆ<sup>ル</sup>万<sup>ノ</sup>葉<sup>ノ</sup>哥<sup>ノ</sup>も多<sup>ク</sup>を<sup>シ</sup>佐<sup>ナ</sup>奈<sup>ノ</sup>葛<sup>ヲ</sup>と<sup>シ</sup>  
よ<sup>ク</sup>免<sup>ル</sup>山<sup>ノ</sup>佐<sup>ナ</sup>奈<sup>ノ</sup>葛<sup>ヲ</sup>と<sup>シ</sup>十<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>免<sup>ル</sup>又<sup>ニ</sup>二<sup>ノ</sup>卷<sup>ノ</sup>狭<sup>ノ</sup>根<sup>ノ</sup>葛<sup>ヲ</sup>十<sup>ノ</sup>  
一<sup>ノ</sup>卷<sup>ノ</sup>核<sup>ノ</sup>葛<sup>ヲ</sup>もゆ<sup>ル</sup>十二<sup>ノ</sup>真<sup>ノ</sup>玉<sup>ノ</sup>葛<sup>ヲ</sup>と<sup>シ</sup>ゆ<sup>ル</sup>田<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>道<sup>ヲ</sup>  
麻<sup>ノ</sup>呂<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>云<sup>フ</sup>了<sup>ラ</sup>多<sup>ク</sup>て此<sup>ノ</sup>物<sup>ノ</sup>後<sup>ノ</sup>の哥<sup>ヲ</sup>○春<sup>ノ</sup>師<sup>ノ</sup>の字<sup>ヲ</sup>須<sup>ニ</sup>尔<sup>ニ</sup>都<sup>ノ</sup>  
伎<sup>ノ</sup>訓<sup>ハ</sup>多<sup>ク</sup>ゆ<sup>ル</sup>依<sup>ル</sup>多<sup>ク</sup>從<sup>テ</sup>多<sup>ク</sup>依<sup>ル</sup>。○云<sup>フ</sup>は漢<sup>ノ</sup>籍<sup>ヲ</sup>訓<sup>ハ</sup>を<sup>シ</sup>依<sup>ル</sup>多<sup>ク</sup>。万<sup>ノ</sup>  
葉<sup>ノ</sup>十六<sup>ノ</sup>辛<sup>ノ</sup>碓<sup>ノ</sup>尔<sup>ノ</sup>春<sup>ノ</sup>磴<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>尔<sup>ノ</sup>春<sup>ノ</sup>○滑<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>那<sup>ノ</sup>米<sup>ノ</sup>と訓<sup>ハ</sup>修<sup>シ</sup>。師<sup>ノ</sup>  
那<sup>ノ</sup>米<sup>ノ</sup>理<sup>ノ</sup>と訓<sup>ハ</sup>多<sup>ク</sup>ゆ<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>も多<sup>ク</sup>れと<sup>シ</sup>な<sup>レ</sup>れども古<sup>ノ</sup>く然<sup>ラ</sup>云<sup>フ</sup>  
俗<sup>ノ</sup>言<sup>ヲ</sup>も常<sup>ノ</sup>滑<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>云<sup>フ</sup>今<sup>キ</sup>五<sup>ノ</sup>味<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>依<sup>ル</sup>多<sup>ク</sup>てい<sup>テ</sup>滑<sup>ノ</sup>の



つれ物なりて今世も水は漬一置て梳ゆふ用依物な  
故美男尊とも美人草とも云ふ。故思ふに佐那てふ  
名も真滑の省を依る。佐泥と云も那米を切免て泥  
と云ふ。師の万葉考別記に云ふ。○箒椅箒字を  
箒を誤りたり。箒を由を。然しとも諸本皆同く此  
なり。延佳本に箒と書依故。今も字を姑然てつれ  
ま。椅を今を王偏ふ作。非をれ。前云依がご  
し。須婆志と訓修し。竹をやを箒は編ゆ。打渡一置  
て船中此方彼方と歩渡依便し。ゆれ物なれ。玉  
垣官段は黒櫨橋ゆ。考合ま。傳は五の。踏應什  
布美豆多布流倍久と訓修し。踏を布米婆或は布麻  
渡を訓て。こ。こ。

惟を依る如くあき。其をゆ。身過して後の言  
をきあり。且此を大山守命に。必踏給布修く構。ゆ  
なれ。布美豆。○王子を宇遲王なり。○賤人を夜都古  
と訓修し。但し。此を王子對了て。九人を臣と云。白橋原  
五瀬命の負賤奴之痛手と詔す。依を。王對了て。臣  
を云。夜都古なり。此事傳十八の卅七葉に委云。王  
を異て。字れ如く。下賤者を云なり。對て臣を云。か  
おのけり。下賤者を云。○執楨。を。河の渡舟を  
儀。楨を。佐表と訓修き。如くなれ。下の御哥。佐  
を。加遲と訓て。宜し。舟を。進。具を。何。も。總て  
を。隱伏を。二字を。加久志と訓修し。さて。此を。他處  
は。伏し。設置す。多は。非。兵士の装束を。隱。と云

て、伏字<sup>フ</sup>を<sup>シ</sup>温<sup>ニ</sup>次<sup>ニ</sup>を<sup>シ</sup>依<sup>ニ</sup>衣<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>服<sup>ニ</sup>鎧<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>依<sup>レ</sup>是<sup>ナリ</sup>なり。○鎧<sup>ヲ</sup>を  
和名抄<sup>ニ</sup>唐韻<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>鎧<sup>ハ</sup>甲<sup>也</sup>和名<sup>ヲ</sup>与<sup>ル</sup>路<sup>比</sup>釋名<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>甲<sup>ハ</sup>似<sup>ル</sup>物<sup>之</sup>  
有<sup>ル</sup>鱗<sup>甲</sup>也<sup>ト</sup>依<sup>レ</sup>呂<sup>布</sup>と云<sup>フ</sup>用<sup>言</sup>を<sup>シ</sup>躰<sup>言</sup>少<sup>ク</sup>て身<sup>ヲ</sup>  
と<sup>シ</sup>り<sup>ル</sup>由<sup>レ</sup>名<sup>ナリ</sup>。即<sup>チ</sup>後<sup>世</sup>の言<sup>ハ</sup>も<sup>シ</sup>甲<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>服<sup>ス</sup>  
足<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>也<sup>意</sup>同<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ル</sup>然<sup>レ</sup>依<sup>ル</sup>云<sup>フ</sup>今<sup>世</sup>人<sup>甲</sup>を<sup>シ</sup>万<sup>葉</sup>  
如<sup>ク</sup>夫<sup>登</sup>胃<sup>を</sup>与<sup>ル</sup>呂<sup>比</sup>と<sup>シ</sup>心<sup>得</sup>多<sup>ク</sup>依<sup>ル</sup>を<sup>シ</sup>反<sup>ス</sup>る<sup>ナリ</sup>。万<sup>葉</sup>  
一<sup>ヲ</sup>取<sup>リ</sup>与<sup>ル</sup>呂<sup>布</sup>天<sup>乃</sup>香<sup>具</sup>山<sup>○</sup>衣<sup>中</sup>服<sup>を</sup>許<sup>ル</sup>呂<sup>母</sup>能<sup>守</sup>知<sup>ル</sup>  
尔<sup>ニ</sup>伎<sup>世</sup>互<sup>ト</sup>訓<sup>修</sup>服<sup>を</sup>兵<sup>士</sup>等<sup>ヲ</sup>令<sup>ス</sup>服<sup>依</sup>なり。如此<sup>ク</sup>云<sup>フ</sup>  
て<sup>シ</sup>王<sup>ノ</sup>御<sup>躬</sup>冷<sup>う</sup>う<sup>レ</sup>装<sup>束</sup>も<sup>シ</sup>同<sup>ク</sup>然<sup>ル</sup>依<sup>ル</sup>を<sup>シ</sup>此<sup>ノ</sup>語<sup>ヲ</sup>  
含<sup>メ</sup>る<sup>ニ</sup>又<sup>シ</sup>服<sup>を</sup>伎<sup>互</sup>と<sup>シ</sup>訓<sup>テ</sup>王<sup>ノ</sup>服<sup>賜</sup>云<sup>フ</sup>言<sup>ハ</sup>りて  
兵<sup>士</sup>を<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>含<sup>メ</sup>り<sup>ト</sup>見<sup>む</sup>も<sup>シ</sup>違<sup>ハ</sup>じ<sup>テ</sup>下<sup>卷</sup>穴<sup>穗</sup>官<sup>段</sup>に

も<sup>シ</sup>衣<sup>中</sup>服<sup>甲</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>ル</sup>さて<sup>テ</sup>如此<sup>ク</sup>為<sup>レ</sup>給<sup>ル</sup>を<sup>シ</sup>攻<sup>ム</sup>と<sup>シ</sup>依<sup>ル</sup>狀<sup>ヲ</sup>  
を<sup>シ</sup>隱<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>宇<sup>遲</sup>王<sup>を</sup>お<sup>こ</sup>う<sup>と</sup>し<sup>テ</sup>免<sup>レ</sup>む<sup>ル</sup>也<sup>ナリ</sup>。○嚴<sup>を</sup>  
師<sup>ノ</sup>伊<sup>加</sup>米<sup>志</sup>久<sup>ト</sup>訓<sup>修</sup>依<sup>ル</sup>に<sup>シ</sup>依<sup>ル</sup>に<sup>シ</sup>其<sup>由</sup>を<sup>シ</sup>上<sup>ニ</sup>嚴<sup>ニ</sup>  
饒<sup>其</sup>家<sup>ト</sup>依<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>傳<sup>世</sup>二<sup>ノ</sup>の<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>嚴<sup>饒</sup>之<sup>處</sup>を<sup>シ</sup>  
か<sup>ノ</sup>其<sup>山</sup>之<sup>上</sup>張<sup>絶</sup>垣<sup>云</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>ル</sup>處<sup>ナリ</sup>。○望<sup>を</sup>美<sup>夜</sup>  
理<sup>互</sup>と<sup>シ</sup>訓<sup>修</sup>倭<sup>建</sup>命<sup>ノ</sup>御<sup>哥</sup>に<sup>シ</sup>奈<sup>苗</sup>美<sup>良</sup>乎<sup>美</sup>也<sup>礼</sup>波<sup>バ</sup>  
止<sup>保</sup>志<sup>云</sup>と<sup>シ</sup>熱<sup>田</sup>社<sup>寛</sup>平<sup>万</sup>葉<sup>十</sup>十三<sup>ノ</sup>に<sup>シ</sup>吾<sup>者</sup>見<sup>將</sup>遣<sup>君</sup>  
之<sup>當</sup>波<sup>○</sup>以<sup>為</sup>弟<sup>王</sup>坐<sup>其</sup>吳<sup>床</sup>か<sup>ノ</sup>舍<sup>人</sup>を<sup>シ</sup>宇<sup>遲</sup>王<sup>ヲ</sup>  
と<sup>シ</sup>り<sup>ル</sup>。○執<sup>楨</sup>而<sup>の</sup>而<sup>字</sup>多<sup>ク</sup>此<sup>本</sup>に<sup>シ</sup>無<sup>シ</sup>今<sup>を</sup>  
真<sup>福</sup>寺<sup>本</sup>又<sup>一</sup>本<sup>に</sup>依<sup>ル</sup>無<sup>キ</sup>も<sup>シ</sup>惡<sup>ク</sup>○都<sup>を</sup>加<sup>都</sup>互<sup>ト</sup>

訓傳一、万葉四四十丁二、花勝見都毛不知恋裳摺可此聞都、  
花勝見と序云、必加都互と訓傳、書紀もかく訓了、又万葉十九  
丁、木高者曾木不殖、○執楫者も字に随ふ、加遲斗礼  
流母能と訓傳、此考、かぢとあり、○忿怒之大猪、大后  
段も、大怒猪、書紀雄略卷も、嗔猪とあり、オホキナ、オホカリキ、其  
時、方了と、怒を依を云、依をれ、依をれことあるを、此  
を其時、方了りて云、非、其猪、恒のさ了を語、依  
処を、イカレ忿怒と云、こといか、イカレ尔、闻ゆ、イカレ伊加理猪  
と云、称、れ、依をを以て思、イカレ其、猛きことをかく  
考、云、イカレ守、依をれ、依をれ、イカレかく猪、此事を問、給、イカレ依をれ

考、此猪を取、よ来坐依、さる、思、は、せ、む、と、て、あり、○答  
曰、の、曰、字、諸本、よ、白、と、あり、今、考、真福寺本、よ、依、あり、  
次、も、答、曰、と、あり、是以、白、の、白、と、楫、者、○不能  
也、延、エ多、麻、波、士、と、訓傳、此、詞、を、れ、密、異、あり、○不能  
下、の、延、エ猪、を、獲、依、を、云、伊勢物語、得、云、く、せ、ト五、條、と、云、得、あり、  
考、依、女、と、え、云、又、女、の、え、得、あり、  
ト、イカレ何、由、イカレ伊、加、那、礼、  
婆、と、訓傳、也、字、を、讀、○時、也、考、余、理、余、理、と、訓傳、  
此、字、と、い、か、置、依、り、か、次、を、依、も、同、ト、持、統、紀、も、然、訓、了、又、崇、峻、卷、  
三、度、推、古、卷、も、兩、度、持、統、卷、も、六、齋、合、イ、イ、を、訓、依、余、理、と



の五味と篋椅は塗置ぬるを何の用ぞやいふ事  
と聞ゆ若くは其の篋椅を踏でしは後く構おき事  
も此謀は後しそし給はざりし因て如此き  
然るも然らば是もかねて此定免うぞ  
を傾きしむ時若し篋椅の浮ぬるを乗て適むる考  
ふ修し書紀をかくは五味の事をいふ事  
山守命をりて此船を傾きぬるを宇遲王も  
て如此謀ありし設けりし事なれぬ  
溺賜ふりし設けりし事なれぬ  
河に舟をりし今延佳本よ無きふ依りし  
いと訓て初るを沈入しが今浮出と云ふ事  
思ふと云ふるを余字に形此似ぬる事なれぬ  
○浮出随水流下是此王水中此事を得賜りしと

おがしとて沈溺し給はるる浮出て水に任せ流  
せり川下の方より逃賜りし水に溺れておの  
非び此所とせし書紀云時太子設兵待之大山守皇  
子不知其備兵獨領数百兵士夜半發而行之會明諸菟  
道將渡河時太子服布袍取檝櫓密接度子以載大山守  
皇子而濟至于河中詔度子蹈船而傾於是大山守皇子  
墮河而沈更浮流之歌曰云々○知波夜夫流是書紀  
を知破椰臂苔と河共宇遲の枕詞にて冠辞考よ  
見ゆ但彼考よ知波夜の知を稜威と一ツよ○宇遲能和  
多理迹を宇治の渡りなり渡りし處を云○佐袁斗理迹を

棹取サツトリよなり。契冲キチウ棹取サツトリよ欵ケンと云て。又万葉十九マンヤクニジュウ。楹ヒコ野ノ。  
此句コノクミを結ムスの許ヨシ牟ムと云、了マツル係ケイ。  
○波夜ハヤ祁牟ケム比登斯ヒトシ。契冲キチウ將速人クムヤなり。斯コノを助語サツゴ。  
を省シラと云ト。早ハヤ。○和賀ワガ毛古迹モコニ許牟コムは吾許ワガ。  
所コロよ来キむなり。書紀垂仁卷清寧卷欽明卷をシテふ。左右。  
皇極卷よ。床側トコノヘをシテ毛登古モトコと訓ト。許所ヨシの義コトなり。登ト。  
所コロを省シラきて古コと云ト。官ツカサ。又垂仁卷よ。左右をシテ毛登古モトコ。古コ。  
登トとも訓ト。許所ヨシ人ヒトなり。かくて此コノを其登トを省シラきて。  
毛古モコや云ト。然シカド海ウミ登トと古コや横ヨコ通ト知チて。許ヨシなニさて此コノ句クミ。  
契冲キチウの御方ミカタよ速ハヤき者モノなり。感カミ吾許ワガ許ヨシり助サツを来キ係ケイし。

と詔ミコトノコト了マツル係ケイかく云ト係ケイ其意コノコトを係ケイ。棹取サツトリよと云、吾ワガを乗ノリ。  
或人シテ此コノを疑ウタガハシひて。此コノ王ミコ。  
給タマフふニと云、むニふニ舟フネをよシせシと云ト。係ケイも一ヒト。  
謂イハレふニ此コノ時トキ河岸カガシに宇遲ウヂ王ミコの兵士ヒヤウシに矢刺ヤサシ。  
追オヒ奉ホウ係ケイふニ因ユヰて終ハシりて得エ道ミチを給タマフはで沈シヅ没ボツあり。さて  
を思オモふニ係ケイ必カナラ御方ミカタに助サツを待マツ賜タマフをシむニを宜ヨシなり。さて  
契冲キチウが又マタ云ト係ケイを水練ミヅネをシり長ナガしテ太子タチに御方ミカタの人ヒト。  
よ向ムカひて自贖ココロカヒし給タマフ係ケイかクと云ト。然シカド云ト係ケイ意コトを舟フネを  
傾カガシて吾ワガを墮オチ入イリるニ也ナリ。吾ワガを溺ノロせシかクの如トシくよク。  
浮ウチて道ミチ係ケイを若ニシ其方コノカタに輕捷カササキき人ヒトなり。感カミ此コノ處トコロよ来キて  
吾ワガを捕ツクりよシされど得エ捕ツクりしとほシり賜タマフ係ケイをシらシ。  
是コノもさシも係ケイはシらシ。聞クひシてさシて棹取サツトリみと云ト。  
こノ書紀シキも同ナリく清音キヨネの刀字ヤを用ヨウひシて斗ト字ジ清音キヨネふ  
を河カガシに墮オチ入イリて又マタ此コノ御哥ミカれ事コトを師シの考カウふ思オモひシけ  
毛モあり交マツル且ナリかく哥カを給タマフ係ケイをシらシ。伏兵フツヘイ起タツりて矢刺ヤサシく



わしをみこころなり。○流ナガキこそ少ニコ言足らぬこと  
まれど、矢を河中射入ゆ。如ナ聞ゆきど、然ナも流ナガキ流ナガキ  
大山守命は流を逃賜ふと、矢刺しかゝて射留トモえ  
むと、流状サマを見せて射コトびし。追流オヒはゆ流ナガキし。此コト  
上の隨水ツグミ流下ナと云。地チも早く射殺さむと、地チは流ナガキ  
より係ケで見流ナガキし。地チも早く射殺さむと、地チは流ナガキ  
さふ。故コトらふ放ナして流ナガキし。やまれば、宇遲王は御心  
不ナて、其由次ツギゆれ御哥ミカに見えし。○訶カ和羅ワ之前ノを書  
紀崇神卷キタカミよ云。故時コト人号ヒトナ其ミ脱ヌケ甲處カウヂ曰イハ伽和羅カワラと云。これ  
を山城國綴喜郡ヤマトノクニツグキノみて、今河原村と云。あゆ地チなり。や云  
流ナガキ其ミと一ヒトみて、名ナは由縁ユヱを傳ツトの異ヒトを流ナガキなり。かゝて此

地チは在所ノ宇治川の末ノの。此コト河を宇治郡と綴喜郡と  
郡と久世郡との堺を流ナガキし。紀伊郡キイノ入ノ末ノりて泉河イハと  
つりなり。淀川と云。又綴喜郡と訓郡との堺を流ナガキ  
至ニ流ナガキなり。綴喜郡と訓郡との堺を流ナガキし。ゆあり  
此コト河を宇治川と云。川邊カハめて綴喜郡の方カタりゆれを流ナガキ  
か。崇神卷タカミを流ナガキし。○沈シヅ入ノを大山守命終ノり遁得ニ  
然シカて地理チと云。叶ハなり。○沈シヅ入ノを大山守命終ノり遁得ニ  
流ナガキ溺ノ沈シヅを御亡ミカ賜タマふゆあり。○鉤カギを加岐カギと訓ツトし。今  
は鷲トビ口ノを云物。書紀皇極卷キよ木鉤キカギと云。見ミえ。欽明卷  
の類シはさるなり。書紀皇極卷キよ木鉤キカギと云。見ミえ。欽明卷  
よ。鉤カギ戟ノと云も見ゆ。○甲カを鎧カギなり。○訶カ和羅ワ鳴ナを訶カ和  
羅ワと云。甲カよ鉤カギの觸ツて鳴ナゆれ音ネと云なり。新井氏ニイノ訶カ和  
名ナなりと云。此コト段タマ及タかの書紀の崇神卷タカミを引ヒ又マ龜カメ甲  
を俗ノよかゝのかゝると云も同意なり。と云。今イマ按オす。

式身依筑後国三井郡高良玉垂命神社を建内宿祢を  
祠りて高良をかゝると唱ふ是若を韓國御言向の時  
波国氷上郡をどりも加和良神社ありて式了出雲  
風土記りも意宇郡も式外も加和羅社ありて式了出雲  
甲も依身依名よせりむ又屋を昔く尾を韓語なり  
と云もされことなりむ若も此も龜甲と同意りて  
本より此方の言りて和の波も轉りて云説いはして聞  
む此ら合せて思ふ所甲の古名と云説いはして聞  
えり信よ龜甲と云別よ一の傳りて實を鉤を甲と  
鳴し故よ負りて依身依名よせり此の地名をかゝると  
繫て出り多依を以て負せ依を依修し書紀も甲と  
脱し故り名と云りも古名とてとて叶り彼を或  
説り甲とぬがてかゝると云語り於も同いと云依をい  
ふかほりなりと云語り於も同いと云依をい  
又思ふり甲をかゝると云りも其本れ起は此の故事  
りてかゝると鳴りて以ての名うとも云依をいれどな  
源然よき

○骨を加婆泥と訓修し大山守命の御屍な

予古此骨字と屍のことと通はし用初りてなり  
もと屍の年と經て骨れかぎりよをれ依と云依り  
出多れを依修し今世よ死骸と云骸字も骨のことな  
り書紀顯宗卷よ御骨埋處欽明卷よ骨積於巖岫をど  
り於も屍なり万葉十八二十丁よ海行者美都久屍山行  
者草牟須屍○掛を加伎と訓修し搔れ意なり  
意りて上卷よ掛出胃乳やり於起よ云依が如し傳八  
十八書紀云然伏兵多起不得著岸遂沈而死焉令求其  
屍泛於考羅濟時太子視其屍歌之曰云々○知波夜比  
登比を清音なり濁依を訛なり冠辞考よ見ゆ○宇遲  
能和多理迹上をれと同ト○和多理是迹を渡瀬よな

河<sup>カ</sup>ノ<sup>ナ</sup>ク 彼<sup>カ</sup>方<sup>ナ</sup>ヲ<sup>ク</sup> 渡<sup>ワ</sup>ル<sup>ル</sup> 處<sup>ト</sup>ニ<sup>シ</sup> 云<sup>フ</sup> 万<sup>マン</sup>葉<sup>エフ</sup> 十<sup>ジュウ</sup>二<sup>ニ</sup> 三十 二丁 倭<sup>ヤマト</sup>路<sup>ヂ</sup>度<sup>タク</sup>

瀨<sup>セ</sup>別<sup>ベツ</sup> 十<sup>ジュウ</sup>七<sup>シチ</sup> 四十 九丁 波<sup>ハ</sup>比<sup>ヒ</sup> 都<sup>ツ</sup>奇<sup>キ</sup>能<sup>ノ</sup> 可<sup>カ</sup>波<sup>ハ</sup>能<sup>ノ</sup> 和<sup>ワ</sup>多<sup>タ</sup>理<sup>リ</sup> 瀨<sup>セ</sup>ノ<sup>ト</sup> 河<sup>カ</sup>

渡<sup>ワ</sup>ル<sup>ル</sup> 瀨<sup>セ</sup>ノ<sup>ト</sup> 云<sup>フ</sup> 用<sup>ヨウ</sup>言<sup>ゴン</sup>ヲ<sup>シ</sup> 是<sup>セ</sup>書<sup>ショ</sup>

紀<sup>キ</sup>ノ<sup>ト</sup> 渥<sup>ワク</sup>ヤ<sup>ヤ</sup> あり 渥 万<sup>マン</sup>葉<sup>エフ</sup> 走<sup>ソウ</sup>出<sup>シュツ</sup> 出<sup>シュツ</sup> 意<sup>イ</sup>ヲ<sup>シ</sup> 清<sup>セイ</sup>キ<sup>キ</sup>ナ

渡<sup>ワ</sup>出<sup>シュツ</sup> と云 岸<sup>キ</sup>際<sup>サイ</sup> と云 〇多<sup>タ</sup>豆<sup>トウ</sup>流<sup>リウ</sup> 三言 立<sup>タチ</sup>依<sup>イ</sup> 多 渡<sup>ワ</sup>瀨<sup>セ</sup>ノ<sup>ト</sup> 河<sup>カ</sup>

あり 此<sup>コノ</sup>岸<sup>キ</sup>ノ<sup>ト</sup> 生<sup>オヒ</sup>立<sup>タチ</sup> あり 書<sup>シヤク</sup>紀<sup>キ</sup>神<sup>シノ</sup>代<sup>ダイ</sup>卷<sup>マク</sup>小<sup>コ</sup>門<sup>カド</sup>前<sup>マヘ</sup>所<sup>コロ</sup>植<sup>ウヅ</sup>

湯<sup>ユ</sup>津<sup>ツ</sup>桂<sup>ケイ</sup>木<sup>キ</sup> 所<sup>コロ</sup>植<sup>ウヅ</sup> 此<sup>コノ</sup>云<sup>フ</sup> 多<sup>タ</sup>底<sup>テイ</sup>婁<sup>ロ</sup> 〇阿<sup>ア</sup>豆<sup>トウ</sup>佐<sup>サ</sup>由<sup>ユ</sup>美<sup>ミ</sup> 五言 契<sup>ケイ</sup>冲<sup>チュウ</sup>

麻<sup>マ</sup>由<sup>ユ</sup>美<sup>ミ</sup> 此 句<sup>コト</sup> 八<sup>ハチ</sup>言<sup>ゴン</sup> と云 〇阿<sup>ア</sup>豆<sup>トウ</sup>佐<sup>サ</sup>由<sup>ユ</sup>美<sup>ミ</sup> 五言 契<sup>ケイ</sup>冲<sup>チュウ</sup>

名<sup>ナ</sup>楸<sup>ク</sup>之<sup>ノ</sup>属<sup>リョク</sup>也<sup>ナリ</sup> 和<sup>ワ</sup>名<sup>ナ</sup>阿<sup>ア</sup>豆<sup>トウ</sup>佐<sup>サ</sup> 此 和<sup>ワ</sup>名<sup>ナ</sup>抄<sup>セウ</sup> 孫<sup>ソン</sup>愼<sup>シン</sup>切<sup>ケツ</sup>韻<sup>イン</sup>云<sup>フ</sup> 梓<sup>ソ</sup>木<sup>キ</sup>

あり 梓<sup>ソ</sup>弓<sup>コウ</sup> 此 木<sup>キ</sup>ヲ<sup>シ</sup> 以<sup>ヨリ</sup>テ 作<sup>サス</sup>レ<sup>ル</sup> 弓<sup>コウ</sup>ヲ<sup>シ</sup> 加<sup>カ</sup>テ 古<sup>コ</sup>キ<sup>キ</sup> 弓<sup>コウ</sup>

不<sup>フ</sup>多<sup>タ</sup> 此 木<sup>キ</sup>ヲ<sup>シ</sup> 用<sup>ヨウ</sup>シ<sup>テ</sup> 故<sup>ユヘ</sup> 何 此<sup>コノ</sup> 木<sup>キ</sup> と云 品<sup>ヒン</sup>ヲ<sup>シ</sup> 分<sup>ワケ</sup>テ 云<sup>フ</sup>

弓<sup>コウ</sup> 此<sup>コノ</sup> 常<sup>ジョウ</sup> 梓<sup>ソ</sup> 弓<sup>コウ</sup> と云 〇麻<sup>マ</sup>由<sup>ユ</sup>美<sup>ミ</sup> 三言 檀<sup>タン</sup> 木<sup>キ</sup> 和 名<sup>ナ</sup>

抄<sup>セウ</sup> 〇唐<sup>タウ</sup>韻<sup>イン</sup>云<sup>フ</sup> 檀<sup>タン</sup> 木<sup>キ</sup> 名<sup>ナ</sup> 也<sup>ナリ</sup> 和<sup>ワ</sup> 名<sup>ナ</sup> 万<sup>マン</sup> 由<sup>ユ</sup> 三<sup>サン</sup> 〇阿<sup>ア</sup>豆<sup>トウ</sup>佐<sup>サ</sup> 由<sup>ユ</sup> 美<sup>ミ</sup>

良<sup>リョウ</sup>キ<sup>キ</sup> 材<sup>サイ</sup> 此 以<sup>ヨリ</sup>テ 真<sup>マコト</sup> 弓<sup>コウ</sup> 此<sup>コノ</sup> 木<sup>キ</sup> と云 色<sup>シキ</sup> 白<sup>ハク</sup>キ<sup>キ</sup> 故<sup>ユヘ</sup>

白<sup>ハク</sup>檀<sup>タン</sup> 此 云<sup>フ</sup> 是<sup>セ</sup> 此<sup>コノ</sup> 樹<sup>ジュ</sup>ノ<sup>ト</sup> 河<sup>カ</sup>ノ<sup>ト</sup> 邊<sup>ヘ</sup> 生 立<sup>タチ</sup> 依<sup>イ</sup> 見 賜<sup>チ</sup>

牙<sup>ガ</sup> 依<sup>イ</sup> 即 其<sup>コノ</sup> 以<sup>ヨリ</sup>テ 大<sup>ダイ</sup> 山<sup>サン</sup> 守<sup>シュ</sup> 命<sup>メイ</sup> を 譬<sup>ヒ</sup> 与 之 賜<sup>チ</sup>

依<sup>イ</sup> 其 取<sup>ク</sup> 此 二<sup>ニ</sup> 句<sup>コト</sup> 心<sup>シン</sup> 得<sup>トク</sup> あり

上<sup>ジョウ</sup> 此<sup>コノ</sup> 梓<sup>ソ</sup> 弓<sup>コウ</sup> 枕 詞<sup>ジ</sup> 此<sup>コノ</sup> 如<sup>コト</sup> 多 非 比<sup>ヒ</sup> 多 豆<sup>トウ</sup>

〇古<sup>コ</sup>事<sup>ジ</sup>記<sup>キ</sup>傳<sup>デン</sup>三<sup>サン</sup>十<sup>ジュウ</sup>三<sup>サン</sup>

〇六<sup>ロク</sup>十<sup>ジュウ</sup>八<sup>ハチ</sup>

〇古<sup>コ</sup>事<sup>ジ</sup>記<sup>キ</sup>傳<sup>デン</sup>三<sup>サン</sup>十<sup>ジュウ</sup>三<sup>サン</sup>

流を檀木の立跡ふて梓弓は其樹を云ふ非にふが弓  
の意了々枕詞の如くをれ寄哥れ意了を関かゞ至と  
心得梓弓れ真弓と云詞の考ふきをなりしは寄麻由美  
を梓弓なり此詞の考ふきは意是弓ふて哥れ意是檀  
木なり然跡此二句立跡梓弓と云ふ寄故梓  
木跡梓木の弓と檀木れ弓を弓二の如くふも聞えて  
かゝる契沖これを得辨了と梓弓真弓共了弓のこ  
なり注して此を伏兵の弓なりと云跡非了弓のこ  
立と云詞考跡も其は事れさふふこせり伏兵  
の弓持て射向ふ事を立跡梓弓なりと云いりか云  
む又此二句梓木と檀木と二種れ生立跡を詔了跡  
ともし思了若然ら寄ふと梓弓の多しを所れ法寄  
梓弓と云ふ二種り非にかの白檜原宮段の哥れ譬  
了跡形身寄二種り非にかの白檜原宮段の哥れ譬  
了跡形身寄二種り非にかの白檜原宮段の哥れ譬  
了跡形身寄二種り非にかの白檜原宮段の哥れ譬

了麻由美を檀樹と見し寄○伊岐良牟登伊を發語  
事もなり易く聞ゆれ乎也○伊岐良牟登伊を發語  
ふて伐むと云契沖が將射斬となり斬を殺了なり  
跡初お説なり射切と云跡を上を弓と見あれり誤と  
也云毛せ免射殺れことをいかたり射斬と云む古  
言よさ跡と云○許く呂波母所村心者雖思なり  
跡傍くもあゝと云○許く呂波母所村心者雖思なり  
万葉又多し心了思了九了思を淤を畧ま々云こ  
宅古哥り多し○伊斗良牟登は是も伊を發語了て取  
むと云りかの生立跡檀木を伐取むと思了もと云  
ら中余伐と取中を分てかくらむと云くと云二ツ云  
是古哥れ文みして常多し契沖が將射取らやなりと云  
ともし古言り所れまそも此いまりむいとむと上  
ふ梓弓云くとあれかゞ誰も感了然思る免了と云

ほらと味を射と見ゆう。いさく上の麻由美をも弓に  
事ぞとを思惑。了此の四句は大山守命を殺さむと  
を思可ともや云ここの譬なり。○母登幣波は本方者  
なり。幣を清音なり。書紀も。○岐美袁淤母比傳を君  
を思出なり。傳字は濁音なり。書紀も。非比。万葉十七十八  
子。吉美乎念出多母登保里伎奴又北四丁子伊弊乎於  
毛比塗なりとも河星出を伊を省て云ここの古哥多。  
此を思の比。伊れ。さる契冲君を應神天皇を傳  
韻。河星波さるなり。○須惠幣波。舊印本は此二句脱多  
と云。然なり。○須惠幣波。其餘の本を皆河星  
末方はなり。本方末方。かの檀木。本と末。やふて。譬

可ぬ。本れ本末。託て君と妹を詔可なり。本れ  
方を伐むと。さる傳云。末れ方を伐むと。され傳云。  
と云む。如。契冲。此を。一。よ。二。み。と。云。む。か。如。  
又。本。可。末。可。共。弓。引。縁。形。り。と。云。ゆ。を。上。を。弓。引。こ  
や。見。ぬ。ぬ。り。非。なり。そ。も。本。可。は。云。く。末。可。を  
云。く。と。は。その。伐。取。む。と。ま。物。り。就。て。可。云。ゆ。さ。ら  
と。形。本。末。を。弓。引。縁。な。れ。傳。と。も。人。を。射。む。と。て  
彼。方。の。字。を。思。ふ。よ。を。此。方。に。持。ゆ。弓。の。本。末。に。就  
て。云。む。を。由。なく。事。あ。が。可。至。此。御。哥。を。大。山。守。命。を。檀  
木。に。譬。て。と。み。給。多。多。彼。王。の。御。哥。を。河。は。さ。ふ。に  
可。不。さ。ら。し。形。を。傳。其。譬。字。に。御。檀。木。に。就。て。詔。可。ゆ。る  
了。こ。可。よ。く。叶。可。れ。此。け。書。紀。繼。躰。卷。哥。小。駄。閑。能。以。矩  
美。娜。閑。余。囊。閑。漢。等。陞。鳴。磨。菩。等。你。都。俱。唎。須。衛。陞。鳴。磨  
府。曳。仁。都。俱。唎。万。葉。十。三。小。三。諸。者。人。之。守。山。本。邊。者。馬

醉木花岡末辺方椿花岡ツビハナサキオノハツバキナガサケこれ山の本末ふ  
○伊毛袁イモモ  
淤母比傳オトヒヒトを妹を思出オモヒなり契冲云大山守皇子オホヤマノミヤノミコ此同母  
妹ふ大原皇女オホハラノミヤノメノミコ瀧田皇女タキノミヤノメノミコ此皇女コノミヤノメノミコあち手イタハ勞了賜了  
此の若考此二人此皇女の内を太子此妃と賜了れ  
か云依了ことお然聞ゆ又大山守命の妃を詔了  
依了も河了依了古の妹と云称を廣き事依了右○伊良  
那ナ那ナ久ク万マン葉エフ十七ナナナの内何をいむ今定免難し  
伊良イラ奈ナ家ケ久ク曾ソ許コ尔ニ念オモヒ出デ奈ナ氣ケ久ク蘇ソ良ラ夜ヤ須ス家ケ久ク奈ナ久ク尔ニ  
と河了コノカハ此の御哥ミコ依了イラ此言是をコノコト除オキて古書コノキあを見  
え交言サカサの意詳サカサを中昔ナカノミ此書コノキどもあは往ココレく見え

依中ふ大和物語よ吾ミさるれワなりナリあれを思  
ふはの依イふいイやけケあふフと河了カハ容イ貌カのいイ々  
〜衰オホ了レ也ヤ考カウ了レ依了イラ云依了イラをれレ此コノ此コノ意イもや近  
く聞ゆ契冲も此コノを引ヒて志シをシ稜カもなナり依了イラを云  
の和名抄云イ苛カ和名伊良イラ小草生刺也コノクサノナミと河了カハ依イらラ考カウ  
無ム苛カの意イ加カ以上契イラと云イ師シも苛カ無ムあア利リ心ココロもモ那ナと  
云よ同ドウトトかカれレ考カウ云イ云イ考カウ依了イラ字ジ鏡キョウよヨ南ナン木キ芒マウ木キ乃ノ伊イ  
肌イダ立タテをヲ云イなりナリ手テ習シユ卷マクよヨこコをヲぐグ〜河海抄カハノミ抄シヤウよヨ寒サムきキ時トキ鳥トリ  
云イこれコレ今イマ世ヨもモ心ココロれレ考カウと云イ同ドウトト右ミダはハ何ナニ云イ  
も苛カ此コノ意イりリ叶エ了レ是コノ對タイ了レ思オモ了レ考カウと云イ同ドウトト右ミダはハ何ナニ云イ  
考カウ〜考カウ無ム苛カあア〜河了カハ依了イラ考カウと云イ同ドウトト右ミダはハ何ナニ云イ



こころを御事多し。あとも山城の宇治川云々と上り  
云て下り。伊良那久と加那志久を分て。二つは詔はむや  
如し。伊良那久と加那志久を分て。二つは詔はむや  
て。言を替て。曾許許くとは詔了ゆのふれて。曾許も許  
許も同く。共り上れ。本方末方を合せ。一つは指て。詔布  
たり。然ゆを契沖が。曾許くとは上の君を指許くとは上  
の妹を指たり。と分て。解ゆを古の意は非は万葉  
長哥をどよ。曾許云く。許く云くと。ゆれも。多く上の指  
事を。つみして。二つを無き。手以て。知ゆ。又本方末方を  
指と云。ばして。君と妹とを指すと云ゆも。尔て。辞を本  
精し。かろ。ま。さ。は。尔。辞。は。叶。は。是。尔。て。小。辞。を。本  
方末方よ就ると云意なり。若君と妹とを指ていはば。  
叶は。又伊良那久も加那志久も。共り上の君と妹  
を。合せて。一つは詔了れなり。此は。分て。見。か。き。結。

本方末方其此を。二つは詔了ゆを。何きもあど哥此文  
のふふとせゆ。必しも君と妹とふ分て。當あゆもを  
非は。う。○伊岐良受曾久流を。伊は同く發語ふて。不  
伐を来ゆなり。来ゆを。宇治より。訶和羅前。を。来ゆふ  
て。大山守命を。宇治より。即殺さむと思む。か。も。君  
の御事。妹此事を。思出て。ゆ。を。なく。悲。て。え。殺。し。も。や  
ら。ま。此。處。る。を。追。流。り。考。来。あり。と。云。と。を。か。の。川。  
边。に。立。ゆ。檀。木。を。得。伐。取。ら。ま。して。来。流。る。ふ。譬。給。了。れ  
なり。○阿豆佐由美。向。麻由美。上。り。同。ど。が。と。上。り。れ。こ  
と。を。再。云。て。結。ゆ。を。古。哥。れ。流。る。なり。○那良山。此。地。上

出傳北五の山を万葉一十三小青丹吉奈良能山乃

又十七青丹吉平山越而をど那保卷く小多く見え

○葬書紀よ乃葬于那羅山と云々此を那良山の

内いけと云うをりまむ詳なりと云々荒墳一在南都猿

澤池東鬼園山相傳大山守皇子墓又名鬼冢と云々

若其処をりむを那良山と云々○思を出ぬる

の北方の山より所傳云々○思を出ぬる

の本より傳ふ云々記中よ葬字と基と作所処多し何

類の少く便とく如此書なりと云々○土形君書紀

榛原君九二族之始祖也と云々和名抄よ遠江國城飼

郡土形加多郷河屋此地よ因む姓なりと云々

他國より傳ふと云々榛原此姓姓氏録より見え

岐君日置と書て幣伎とも比伎とも比淤伎とも云地

名國く小多和名抄よ伊勢國一志郡日置比於木能

置比於木但馬國氣多郡日置比於岐この外を多

於岐とあゆ多幣岐と云々此の地無し其外を比

國よ多く所傳を思ふ云々此の地無し其外を比

と書し思ふ幣伎と云々此の地無し其外を比

幣伎を思ふ幣伎と云々此の地無し其外を比

む又幣伎を正しと云々此の地無し其外を比

比於木と云々此の地無し其外を比

皆然唱了来者此を何國と云々此の地無し其外を比

土形と云、遠江國より河邊、彼國をむむ。今城東郡小比木村と云あり、然るに又和名抄に丹波國多紀郡、榛原郷、日置郷あり。是はも河をむむか、氏を、姓氏録に、右京、日置朝臣、應神天皇皇子、大山守王、之後也とあり。皇別、○榛原君を、榛を波理と訓、万葉に波里波、和名抄に、遠江國、榛原、波良郡、榛原、波良郷あり。是より出ぬるか、其隣に、海城、飼郡に、土形郷あり。又今比木村と云も、河邊にあり。波理を、波と訓、伊と云を、後の音便なり。又右小引、丹波國、河邊にあり。出ぬるか、決まらざり。此地名を、河餘國、河邊にあり。皇別、津國、榛原公、息長、真人同祖、大山守命、之後也。長

真人身、稚濤毛二侯、王の後なり。其、河内國、榛原、同祖と云、河邊にあり。其、河内國、榛原、皇別、譽田、天皇、皇子、大山守命、之後也。

於是大雀命與宇遲能和紀郎

子二柱各讓天下之間海人貢

大贖爾兄辭令貢於弟弟辭令

貢於兄相讓之間既經多日如

アヒユツリタニフコトヒトタビフタビニアラザリケレバ。アマハスデニユキ  
此相讓非一二時故海人既疲

キニツカレテナキケリ。カレコトワザニ。アマナレヤオノガ  
往還而泣也故諺曰海人乎因

己物而泣也然宇遲能和紀郎  
モノカ。ラ。ネナクトジイフ。レカルニウ。ヂ。ノ。ワ。キ。イラツ

子者早崩故大雀命治天下也  
コ。ハ。ハヤクカムサリシヌカレオホサギキノミコトゾアメノシタシロシメシケル。

各讓を阿比由豆理賜と訓修。次子相讓と云。既而興宮室於菟  
く。互。カ。ミ。ミ。讓。ア。ヒ。ユ。豆。理。賜。と。訓。修。一。次。子。相。讓。と。云。既。而。興。宮。室。於。菟。

道而居之猶由讓位於大鷦鷯尊以久不即皇位爰皇位

空之既經三載。其も。宇遲王。此。宇治。子。居。坐。一。是。本。よ  
△ナレクテ。ニ。ナリヌ。ミ。ト。セ。ニ。サ。サ。也。も。く。宇。遲。王。此。宇。治。子。居。坐。一。是。本。よ

の如く既而云々と記されぬ。心得。若。と。と。り  
宇治。子。居。坐。一。是。本。よ。今。始。免。て

由と云。又。此。子。居。坐。一。是。本。よ。今。始。免。て  
宮室を造。改。免。給。事。云。云。と。大。雀。命。子

讓。賜。を。て。御。位。を。造。改。賜。事。云。云。と。大。雀。命。子  
一。を。宮。室。を。造。改。賜。事。云。云。と。大。雀。命。子

人。此。下。云。伊。子。助。辞。を。讀。附。修。一。語。れ。調。れ。免。る。り  
人。此。下。云。伊。子。助。辞。を。讀。附。修。一。語。れ。調。れ。免。る。り

此。助。辞。の。こ。と。○。大。贄。事。上。り。出。傳。此。卷。の。○。兄。子。大。雀  
既。上。り。云。云。○。大。贄。事。上。り。出。傳。此。卷。の。○。兄。子。大。雀

命。弟。を。宇。遲。若。郎。子。り。り。○。弟。辞。の。辞。を。讀。び。て。此。よ。又  
命。弟。を。宇。遲。若。郎。子。り。り。○。弟。辞。の。辞。を。讀。び。て。此。よ。又

と云言を讀添。其。故。は。此。の。語。を。必。兄。者。云。弟。者  
と云言を讀添。其。故。は。此。の。語。を。必。兄。者。云。弟。者

二方共り辞といはば、必弟と云はば語をり然れども  
も弟もと云て是れ九の語れと云はば語をり然れども  
弟もと云はば上れ一方子云は下も應くこと文字を  
ては言は上れ一方子云は下も應くこと文字を  
あは意を以て二方共り辞と書はまこと也  
も訓を必此方の語れと云はば依はまこと也  
多阿麻多比閉奴と訓は師はハニハニと訓は  
多きを佐波と云ははれこと也波も事ふはれ  
一日数の多く経はれこと也波も事ふはれ  
な万葉九丁不遭日数多月乃経良武どり又  
比麻泥久那理奴とも訓は万葉十七丁和可礼  
奈婆見奴日佐麻祢美孤悲思家武可母又  
野尔可良奴日麻祢久都奇曾倍尔家流十八丁月可  
佐祢美奴日佐麻祢美故敷流曾良十九丁十六丁於夜

能御言朝暮尔不闻日麻祢久安麻射可流夷尔之居者  
又三丁不相日麻祢美念曾吾為流くも皆日数の多  
之重を麻泥久と云は佐と例の真れ意を  
九の巻を麻泥久と云は佐と例の真れ意を  
と訓は一度二度は非はれ数度を云○疲往  
還を彼方方此方と幾度となく往還る故なり  
宇治は坐大雀命難波○海人乎阿麻那礼夜と  
坐て其間遠き路程なり  
訓は書紀の訓も然る又阿麻母夜とも訓は其  
近飛鳥宮段大御哥よ意岐米母夜万葉二十一丁吾者  
毛也どり母は助辞夜上卷ふ我那迹妹命乎

と云きて其<sup>コ</sup>延<sup>傳</sup>五の六<sup>ノ</sup>云<sup>ハ</sup>海<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>呼<sup>出</sup>多<sup>ク</sup>辞<sup>め</sup>て余<sup>ヨ</sup>  
中<sup>ニ</sup>云<sup>ハ</sup>同<sup>ト</sup>故<sup>母</sup>余<sup>ト</sup>も云<sup>ハ</sup>りて那<sup>レ</sup>夜<sup>ヤ</sup>と訓<sup>ハ</sup>母<sup>モ</sup>夜<sup>ヤ</sup>と  
訓<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>意<sup>ハ</sup>異<sup>ナ</sup>り其<sup>ノ</sup>事<sup>ハ</sup>は次<sup>ニ</sup>云<sup>ハ</sup>信<sup>ト</sup>。○因<sup>テ</sup>己<sup>ノ</sup>物<sup>而</sup>之<sup>ノ</sup>意<sup>ハ</sup>  
能<sup>ハ</sup>賀<sup>ガ</sup>母<sup>モ</sup>能<sup>ハ</sup>加<sup>カ</sup>良<sup>ラ</sup>と訓<sup>ハ</sup>信<sup>ト</sup>書<sup>ノ</sup>紀<sup>ノ</sup>訓<sup>ハ</sup>も然<sup>ラ</sup>る<sup>ニ</sup>さて此<sup>ノ</sup>母<sup>モ</sup>能<sup>ハ</sup>  
加<sup>カ</sup>良<sup>ラ</sup>常<sup>ニ</sup>云<sup>ハ</sup>辞<sup>ハ</sup>れ<sup>ル</sup>の<sup>カ</sup>思<sup>ハ</sup>多<sup>ク</sup>その<sup>カ</sup>云<sup>ハ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>は  
異<sup>ナ</sup>りて物<sup>ハ</sup>己<sup>ノ</sup>が物<sup>ニ</sup>て非<sup>ズ</sup>加<sup>カ</sup>良<sup>ラ</sup>字<sup>ハ</sup>れ如<sup>ク</sup>因<sup>テ</sup>  
の意<sup>ハ</sup>なり古今集<sup>四</sup>恋<sup>ノ</sup>己<sup>ノ</sup>が物<sup>カ</sup>形<sup>見</sup>と也<sup>見</sup>む是<sup>レ</sup>と  
同<sup>ク</sup>て加<sup>カ</sup>良<sup>ラ</sup>は意<sup>ハ</sup>は姑<sup>ク</sup>異<sup>ナ</sup>り此<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>己<sup>ノ</sup>が物<sup>ニ</sup>因<sup>テ</sup>  
己<sup>ノ</sup>が物<sup>ヲ</sup>が<sup>レ</sup>さて此<sup>ノ</sup>諺<sup>ハ</sup>は尋<sup>常</sup>云<sup>ハ</sup>己<sup>ノ</sup>が無<sup>キ</sup>物<sup>ハ</sup>  
欲<sup>ハ</sup>くて得<sup>ガ</sup>さ<sup>レ</sup>ふ<sup>ニ</sup>て泣<sup>キ</sup>る<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>海<sup>人</sup>を己<sup>ノ</sup>

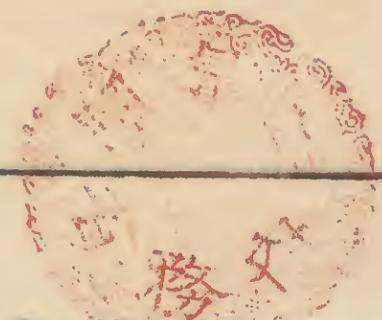
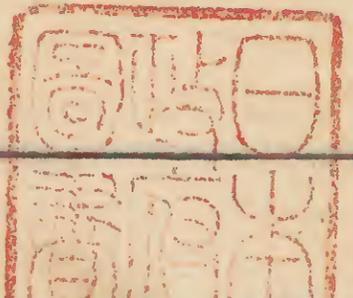
が有<sup>ル</sup>物<sup>ヲ</sup>人<sup>ノ</sup>献<sup>ス</sup>海<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>得<sup>ガ</sup>さ<sup>レ</sup>る<sup>ハ</sup>を愁<sup>シ</sup>泣<sup>キ</sup>常<sup>ニ</sup>然<sup>ル</sup>  
ら<sup>ル</sup>と<sup>キ</sup>反<sup>ス</sup>り<sup>テ</sup>事<sup>ハ</sup>海<sup>ノ</sup>故<sup>リ</sup>其<sup>ノ</sup>意<sup>ハ</sup>を以<sup>テ</sup>世<sup>中</sup>に  
己<sup>ノ</sup>が物<sup>ヲ</sup>人<sup>ノ</sup>與<sup>フ</sup>むと欲<sup>ス</sup>ふ與<sup>フ</sup>か<sup>レ</sup>る<sup>ハ</sup>と<sup>レ</sup>云<sup>ハ</sup>  
て愁<sup>シ</sup>ふ海<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>の譬<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>海<sup>ノ</sup>なり其<sup>ノ</sup>よ<sup>リ</sup>て海<sup>人</sup>乎<sup>ト</sup>云<sup>ハ</sup>  
海<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>ニ<sup>テ</sup>訓<sup>ハ</sup>り<sup>テ</sup>意<sup>ハ</sup>異<sup>ナ</sup>り<sup>ト</sup>云<sup>ハ</sup>那<sup>レ</sup>夜<sup>ヤ</sup>の<sup>ハ</sup>  
き<sup>ハ</sup>古<sup>レ</sup>海<sup>人</sup>を<sup>レ</sup>海<sup>人</sup>と<sup>レ</sup>其<sup>ノ</sup>愁<sup>シ</sup>海<sup>ノ</sup>者<sup>ハ</sup>こ<sup>ノ</sup>云<sup>ハ</sup>  
る<sup>ハ</sup>又<sup>モ</sup>母<sup>モ</sup>夜<sup>ヤ</sup>と<sup>キ</sup>も<sup>モ</sup>海<sup>人</sup>と<sup>レ</sup>此<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>海<sup>人</sup>は<sup>コ</sup>云<sup>ハ</sup>  
を呼<sup>出</sup>し<sup>テ</sup>云<sup>ハ</sup>り<sup>テ</sup>され<sup>ド</sup>諺<sup>ノ</sup>九<sup>テ</sup>は意<sup>ハ</sup>は同<sup>ト</sup>云<sup>ハ</sup>  
海<sup>ノ</sup>何<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>中<sup>ニ</sup>書<sup>ノ</sup>紀<sup>ハ</sup>有<sup>ル</sup>海<sup>人</sup>耶<sup>ト</sup>有<sup>ル</sup>字<sup>ヲ</sup>  
と添<sup>テ</sup>書<sup>キ</sup>る<sup>ハ</sup>那<sup>レ</sup>夜<sup>ヤ</sup>の方<sup>ハ</sup>依<sup>テ</sup>云<sup>ハ</sup>り<sup>テ</sup>那<sup>レ</sup>夜<sup>ヤ</sup>  
を<sup>レ</sup>阿<sup>何</sup>

礼夜の切カりて詞を依故り。書紀云時海人賚鮮魚之  
有字と添ヒらるるに於て。書紀云時海人賚鮮魚之  
苞苴オホニ献于菟道宮也。太子令海人曰我非天皇乃返之令  
進難波大鷦鷯尊亦返以令献菟道於是海人之苞苴オホニ鱒  
於往還更返之取他鮮魚而献焉讓如前日鮮魚亦鱒海  
人苦於屢還乃棄鮮魚而哭故諺曰有海人耶因已物以  
泣其是之縁也。○然と上アヘニの各讓天下云とを兼て云  
海なり。○早崩抑宇遲王崩と記せし事加牟佐理坐  
と云言を必しも天皇も局らるる薨字をも訓るる爲此  
記をよむ其言に依て字を拘らざれりも所は依し  
さしと。又記中り此字と書ゆを天皇を除奉て五瀬

命倭建命此ニ柱を殊なり由り。其起くは云海が如し。さては應神天皇は  
太子坐一時。欺言よ御子既崩。此を後と以て如く  
と所はのふりれ海字義以れありむか若然ら  
海此王を太子坐て殊天津日嗣所知看傍と定る  
早坐海が故りや所らむさて此王は早く崩坐しと  
此記に趣をく何となく崩坐ぬと聞ゆれを書紀に  
は太子曰我知不可奪兄王之志豈久生之煩天下乎乃  
自死焉時大鷦鷯尊聞太子薨以驚之從難波馳之到菟  
道宮爰太子薨之經三日時大鷦鷯尊擗叫哭不知所  
如乃解髮跨屍以三呼曰我弟皇子乃應時而活自起以

居爰大鷦鷯尊語太子曰云太子啓兄王曰云乃進同母  
妹八田皇女曰云乃且伏棺而薨於是大鷦鷯尊素服為  
之發哀哭之甚慟仍葬於菟道山上云云乃解髮跨屍云  
死人之法也云云活之法也云云谷川氏云云是我邦招諸陵式  
魂之法也云云我邦之漢意云云乃諸陵式  
宇治墓菟道稚即皇子在山城國宇治郡北城東西十  
二町南北十二町守戸三烟北城のこよなく廣き山  
城志存朝日山云云墓畔有寺曰興聖寺此御墓山  
齋者削平兆塋所建舊名神明山云云或說宇治離  
宮此王と祠海と云又離宮式を宇治神社に  
奏言昔宇治稚彦皇子者我朝之賢明也此皇子遺教自  
使散骨後世效之云云これ骨を散りて云云當昔云云  
いと心得ぬことなり骨を散りて云云當昔云云  
更り非思ふり後世火葬と云云云事始りて世り

普くなりぬ世り此王の御事を然云云云然云云云  
の出来一形なり形もなき虚説と云云云聞えぬ万  
葉九一丁よ宇治若郎子宮所歌と云妹等許今木乃嶺  
茂立孀待木者古人見祁牟と云今木嶺疑け若く  
治宮外今木り宮ありし今木と云処也云云欽  
明紀外今來郡と見え皇極紀齊明紀孝徳紀云云  
不見えぬ又續紀北七云云田村後宮今木大神と云  
聞えぬ又續紀北七云云田村後宮今木大神と云  
村を奈良よ又續紀北七云云田村後宮今木大神と云  
町東南今離宮山と云此山城志今來嶺在宇治彼方  
り云姓を云れども宇治の山城國今木連又今木  
見云云姓を云れども宇治の山城國今木連又今木  
平野遷奉賜符或人云平野の今木神を世に  
仁徳天皇冬隱り申す花形也平野の松よか云云  
難波津よ冬隱り申す花形也平野の松よか云云  
木綿と云云誤り云云萬葉九北云云宇  
治若郎子なり修云云と云海老さも云云修云云



務

さら事此因云平野と平氏の神と云  
 由多桓武天皇此御産土神坐る故  
 紀了宝亀六年三月置酒田村舊宮  
 盡歡と云思ふ田村舊宮多光仁天  
 白壁王と申せし時の御宅も今木大  
 坐一神なりかゝる桓武天皇も其如  
 御産土神なり遂に平安京に移祭  
 大神と平安京平野に移奉らるも  
 奇り其類聚三代格と見えたり延  
 又冬天皇此幸の行宮と云云此若  
 卯大鷲尊即天皇位

故大雀命云書紀仁徳卷元年春正月  
 丁丑朔己卯大鷲尊即天皇位

